

SigmaSystemCenter 3.3
仮想マシンサーバ(ESX/ESXi)
プロビジョニング

ソリューションガイド

—第2版—

目次

1. 仮想マシンサーバ・プロビジョニング	1
1.1.1.動作環境	2
1.1.2.ESX / ESXiのネットワーク自動構成について	3
1.1.3.導入前の準備手順	5
1.1.4.SigmaSystemCenterの設定	7
1.1.5.仮想マシンサーバ・プロビジョニングの実行方法	12
1.1.6.ESXの構成変更	13
1.1.7.注意・制限事項	15
2. ポリシーを利用した仮想マシンサーバ・プロビジョニング	17
3. 論理ネットワークを利用した仮想ネットワーク構成	21
3.1.1.管理用LANを冗長化する場合	22
3.1.2.業務用LANを冗長化する場合	24
3.1.3.管理用LANと業務用LANを冗長化する場合	26
3.1.4.業務用LANにVLAN IDを設定する場合	27
3.1.5.論理ネットワークを設定しない場合	29
4. ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定	31
4.1.1.ローカルディスクにインストールする場合	32
4.1.2.SANのLUNにインストールする場合	33
5. ESX自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成	35
5.1.1.DPMのセットアップ	36
5.1.2.ESXのキックスタート構成ファイルの作成	37
5.1.3.ESXのキックスタート構成ファイルの編集	40
5.1.4.ESXのブートパラメータファイル作成	42
5.1.5.DPMにOSインストールシナリオ登録	43
6. ESXi 4.1自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成	45
6.1.1.DPMのセットアップ	46
6.1.2.ESXi 4.1のキックスタート構成ファイルの作成	46
6.1.3.ESXi 4.1のブートパラメータファイル作成	48
6.1.4.DPMにOSインストールシナリオ登録	49
7. ESXi 5自動インストール (スクリプトインストール)用シナリオ作成	51
7.1.1.DPMのセットアップ	52
7.1.2.ESXi 5のキックスタート構成ファイルの作成	53
7.1.3.ESXi 5のブートパラメータファイル作成	54
7.1.4.ESXi 5のboot.cfg配置ファイル作成	55
7.1.5.DPMにOSインストールシナリオ登録	57
7.1.6.DHCPサーバ / DPMサーバ別居の場合の設定	59
8. IIS構築	61
8.1.1. IIS6の場合	62
8.1.2. IIS7、IIS7.5、およびIIS8の場合	67
9. DPMを使ったESMPRO/ServerAgent自動セットアップを行うための事前準備 (VMware ESX用)	71
9.1.1.Linuxノパッケージ作成画面を開く	73
9.1.2.ESMPRO/ServerAgentインストール前の設定	74

9.1.3.サーバマネージメントドライバのインストール.....	79
9.1.4.ESMPRO/ServerAgentインストール	81
9.1.5.ESMPRO/ServerAgentのVMware設定	84
9.1.6.ESMPRO/ServerAgentインストール後の設定	86
9.1.7.シナリオファイルの作成.....	88
10. DPMを使ったESXパッチの配信シナリオの作成.....	91

本書の表記規則

本書では、注意すべき事項、重要な事項、および関連情報を以下のように表記します。

注: は、機能、操作、および設定に関する注意事項、警告事項、および補足事項です。

関連情報: は、参照先の情報の場所を表します。

また、本書では以下の表記法を使用します。

表記	使用方法	例
[] 角かっこ	画面に表示される項目 (テキストボックス、チェックボックス、タブなど) の前後	[マシン名] テキストボックスにマシン名を入力します。 [すべて] チェックボックス
「 」 かぎかっこ	画面名 (ダイアログボックス、ウィンドウなど)、他のマニュアル名の前後	「設定」ウィンドウ 「インストールガイド」
コマンドライン中の [] 角かっこ	かっこ内の値の指定が省略可能であることを示します。	add [/a] Gr1
モノスペースフォント (courier)	コマンドライン、システムからの出力 (メッセージ、プロンプトなど)	以下のコマンドを実行してください。 replace Gr1
モノスペースフォント斜体 (courier)	ユーザが有効な値に置き換えて入力する項目 値の中にスペースが含まれる場合は " " (二重引用符) で値を囲んでください。	add <i>GroupName</i> InstallPath=" <i>Install Path</i> "

参照マニュアル一覧

ご使用のSigmaSystemCenterのバージョンに従い、以下のマニュアルを合わせてご参照ください。
本ドキュメントでは、参照個所として最新ドキュメントでの章番号を記載しております。

バージョン	マニュアル名
SigmaSystemCenter 3.3	SigmaSystemCenter 3.3 コンフィグレーションガイド 第2版
	SigmaSystemCenter 3.3 リファレンスガイド 概要編 第2版
	SigmaSystemCenter 3.3 リファレンスガイド データ編 第2版
	SigmaSystemCenter 3.3 リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編 第2版

1. 仮想マシンサーバ・プロビジョニング

本章では、仮想マシンサーバ・プロビジョニングについて、具体的な処理内容や設定方法を説明します。

注: 本ソリューションガイドは、VMware ESX / ESXi が対象です。

仮想マシンサーバ・プロビジョニングでは、VMware ESX / ESXi のインストールとインストール後の設定を自動化し、仮想マシンの作成や Migration (SAN 構築時) が可能な状態までセットアップします。インストールオペレーションの自動化は、システム構築時に多数のサーバにインストールする際や、ESX に障害が発生した場合の復旧に有効です。

以下に、仮想マシンサーバ・プロビジョニングの際に、SigmaSystemCenter が自動で行う処理の流れを説明します。

1. VMware 社のスクリプトインストール機能を利用した ESX / ESXi のインストール
スクリプトインストールを実行するシナリオを配布することで ESX / ESXi をインストールします。
また、インストール時の OS 固有情報 (ホスト名、IP アドレスなど) は、ホスト設定に従って自動で設定されます。

注: スクリプトインストールでは、スクリプトに記述している設定内容に従って自動的にインストールが行われます。

ハードディスク (iSCSI、SAN を含む) の追加、ネットワークアダプタの追加などハードウェア構成の変更を行った場合は、ESX / ESXi のデバイスを認識する順番が変わる場合があります。そのため、ハードウェア構成を変更する前のスクリプトを使ってスクリプトインストールを行うと、インストールが正しく行われずに意図しないディスクに対して、ESX / ESXi がインストールされることで、既に存在するディスク領域が誤ってフォーマットされ、ディスク上の仮想マシンが削除される場合があります。

ハードウェア構成を変更した場合は、必ずスクリプトを再作成してください。

また、スクリプトインストールは、スクリプトの作成元となったマシンと同じハードウェア構成のマシンに対してのみ実行するようにしてください。

2. ESX / ESXi を vCenter Server へ登録
vCenter Server 環境の場合、インストールした ESX / ESXi を、vCenter Server のインベントリに登録を行います。
3. ESX / ESXi のネットワークの自動構成
インストールした ESX / ESXi に対して、VMotion の有効化、仮想ネットワークスイッチ、および仮想ポートグループの作成を行います。
詳細については「1.1.2 ESX / ESXi のネットワーク自動構成について」を参照してください。

1.1.1. 動作環境

仮想マシンサーバ・プロビジョニングは、以下をサポートしています。

ソフトウェア	VMware ESX 4.0、4.1 VMware ESXi 4.1、5.0、5.1、5.5
--------	---

ESX / ESXi のインストール時に Outbox ドライバが必要となるハードウェアに対しては、SigmaSystemCenter による ESX / ESXi の自動インストール（仮想マシンサーバ・プロビジョニング）機能はサポートしていません。

vSphere 4 Outbox ドライバ対応状況については、以下の URL を参照してください。

<http://www.nec.co.jp/vmware/vs4/driver.html>

vSphere 5 Outbox ドライバ対応状況については、以下の URL を参照してください。

<http://www.nec.co.jp/vmware/vs5/driver.html>

SigmaSystemCenter の最新の動作環境については、以下の URL を参照してください。

<http://jpn.nec.com/websam/sigmasystemcenter/dousa.html>

1.1.2. ESX / ESXi のネットワーク自動構成について

仮想マシンサーバのプロビジョニングでは ESX / ESXi の管理用ネットワークと仮想マシン用ネットワークを自動構成します。

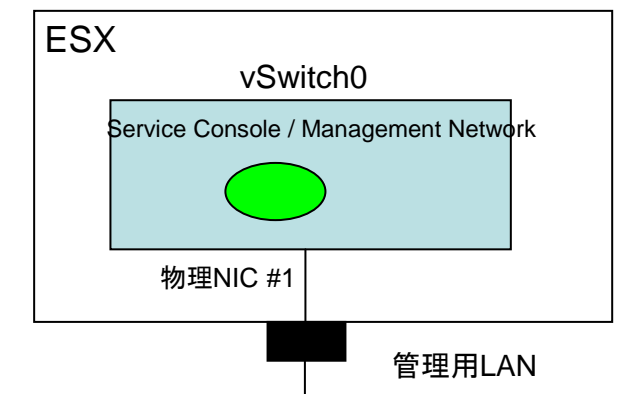
仮想マシン用のネットワークについては論理ネットワークを利用して構成を設定します。詳細は「3 論理ネットワークを利用した仮想ネットワーク構成」を参照してください。

管理用ネットワーク (Service Console / Management Network) については、以下のネットワークが自動で構成されます。

VMKernel については、ホスト設定の [ネットワーク] タブに設定した情報に従って、ネットワークが自動で構成します。

以下の構成からネットワーク構成を変更する場合は、仮想マシンサーバ・プロビジョニング後に手動で設定してください。

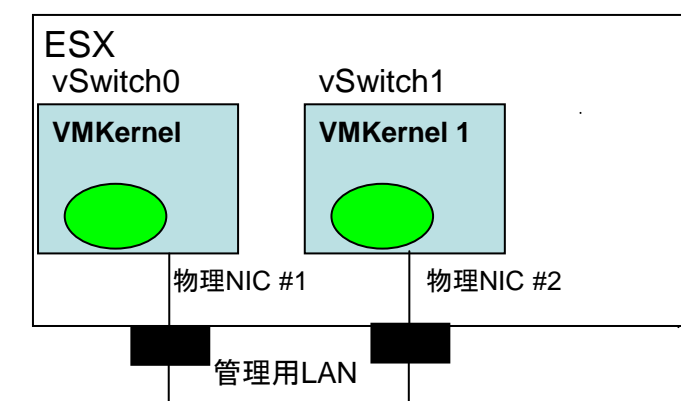
- ◆ 管理用ネットワーク (Service Console / Management Network)
 - スクリプトインストールに使用した物理 NIC に接続する仮想スイッチ "vSwitch0"、および管理用ネットワークがスクリプトインストール時に自動で作成されます。



◆ VMKernel

[ネットワーク] タブに設定したネットワーク情報 (NIC#1 の 1 番目以外) ごとに仮想スイッチ、および VMKernel を作成します。物理 NIC に対して複数のネットワーク情報が設定されている場合は、仮想スイッチ上に複数の VMKernel が作成されます。

複数の VMKernel が存在する場合は、設定したネットワーク情報の NIC 番号の小さい番号を優先し、そのネットワーク情報に一致する VMKernel を VMotion に使います。ただし、ESXi の場合はネットワーク情報を設定しなければ、VMKernel は作成されず、Management Network (ESXi インストール時に作成されます) を VMotion に使います。



Service Console / Management Network に割り当てる IP アドレスは、ホスト設定の [ネットワーク] タブで NIC#1 の 1 番目に指定します。指定方法については、「1.1.4 SigmaSystemCenter の設定」の手順 7 を参照してください。

注:

- ・ 物理 NIC、および仮想 NIC の冗長化設定を行う場合は、「3 論理ネットワークを利用した仮想ネットワーク構成」を参照してください。
- ・ 作成する仮想スイッチ名は固定値です。変更する場合はスクリプトインストール後、個別に手動で設定してください。
- ・ 仮想マシンサーバ・プロビジョニングで使用するマシンが、2 枚以上の物理 NIC を備えている場合、あらかじめマシンプロパティ設定の [ネットワーク] タブにおいて、各 NIC と MAC アドレスの対応を登録しておいてください。登録されていない場合、意図する番号とは異なる NIC 上にネットワークが構成される可能性があります。[ネットワーク] タブの設定の詳細については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.9.2 [ネットワーク] タブを設定するには」を参照してください。

1.1.3. 導入前の準備手順

1. マシンを DPM に登録する

仮想マシンサーバ・プロビジョニングで使用するマシンを DPM に登録してください。
使用するすべてのマシンは、DPM に登録されている必要があります。

関連情報: マシンを DPM に登録する方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「3.7. DPM を利用するための設定を行う」を参照してください。

2. キックスタート構成ファイルを作成するための準備をする (ESX の場合のみ)

VMware ESX の場合にはスクリプトインストールで利用する設定ファイル (キックスタート構成ファイル) は、ESX のインストールを行うことで作成します。

そのため、自動生成したい ESX と同じ構成を持つ ESX を手動でインストールしてください。

3. キックスタート構成ファイル、および自動インストール用シナリオを作成する

注:

- ・ キックスタート構成ファイルは、ESX のバージョンごとにコマンド形式、およびサポートしているコマンドが異なるため、互換性がありません。

- ・ キックスタート構成ファイルについては、「5 ESX 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「6 ESXi 4.1 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「7 ESXi 5 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」もあわせて参照してください。

- ESX の場合

キックスタート構成ファイルを作成するために、ESX のインストール後に、そのマシンのパーティション情報を参照し、ESX のインストールされているディスク (ローカルディスク:/dev/sda など) を確認してください。パーティション情報は ESX の Service Console にログイン後、下記のコマンドを実行することにより確認できます。

```
# fdisk -l
```

パーティションのマウント情報を確認してください。マウント情報は ESX の Service Console にログイン後、下記のコマンドを実行することにより確認できます。

```
# vdf
```

次に、DPM で ESX のクリアインストール (スクリプトインストール) シナリオを作成します。詳細な作成手順については、「5 ESX 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」を参照してください。

また、ESMPROを利用する場合は、DPMでESMPRO/ServerAgentのリモートインストールシナリオを作成します。詳細な作成手順については、「9 DPMを使ったESMPRO/ServerAgent自動セットアップを行うための事前準備 (VMware ESX用)」を参照してください。

- ESXiの場合

ESXiの場合は、VMware社発行のマニュアルを参照して設定ファイル (キックスタート構成ファイル) を作成します。

ESXのようにパーティション情報をコマンドで確認することができないため、共有ストレージ (SANなど) を接続する場合は、インストールするディスクのみを接続する設定を行ってください。詳細については、「4 ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定」を参照してください。

次に、DPMでESXiのクリアインストール (スクリプトインストール) シナリオを作成します。詳細な作成手順については、「6 ESXi 4.1 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「7 ESXi 5 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」を参照してください。

4. ESXパッチ配布シナリオを作成する (ESXの場合のみ)

ESXの修正モジュール (パッチ) は、配信シナリオを登録して自動でインストールすることができます。詳細な作成手順については、「10 DPMを使ったESXパッチの配信シナリオの作成」を参照してください。

ESXiの場合は、DPMクライアントがインストールできないために本機能を使用することはできません。

1.1.4. SigmaSystemCenter の設定

仮想マシンサーバ・プロビジョニングを行うには、仮想マシンサーバ用のグループを作成する必要があります。以下の手順に従って作成してください。

関連情報: グループプロパティ設定、モデルプロパティ設定、ホスト設定の設定方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「5. 運用グループを作成する」を参照してください。

また、仮想マシンサーバ用のグループに登録するマシンは、以下の設定を推奨します。

- ・ 同一ストレージを使用している (同一 LUN (Logical Unit Number) を共有している)
 - ・ 同一セグメントに接続している
 - ・ OOB による BMC 経由での電源制御が可能となっている (詳細は、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「3.10. Out-of-Band (OOB) Management を利用するための事前設定を行う」、および「4.9.6 [アカウント情報] タブを設定するには」を参照してください。)
-

概略手順

1. 仮想マシンサーバ用のグループを作成します
2. ホストプロファイルを設定します
3. 仮想ネットワークを設定します
4. DataCenter を設定します
5. ホストを作成します
6. ストレージを設定します
7. ネットワークを設定します
8. パスワードを設定します
9. スクリプトインストールのシナリオを登録します
10. ポリシーを設定します
11. その他の項目を設定します

1. 仮想マシンサーバ用のグループを作成します。
グループのマシン種別は [VM サーバ]、OS 種別は [Linux] を選択してください。
2. ホストプロファイルを設定します。
グループプロパティ設定の [ホストプロファイル] タブから各項目を入力してください。ホストプロファイルは、グループプロパティ設定の他にモデルプロパティ設定、ホスト設定でも設定できます。管理者パスワードは、ホスト設定の [全般] タブにも設定できます。管理者パスワードの設定は必須です。OS 名の設定は必要ありません。その他の項目は任意です。

注: vCenter Server にはホスト名で登録されます。そのため、ドメインサフィックスを設定した場合、ホスト名 + ドメインサフィックス (FQDN 形式)、ドメインサフィックスを設定しない場合、ホスト名で名前解決ができる必要があります。

vCenter Server をインストールしたマシンが設定した FQDN / ホスト名を名前解決できるか確認してください。

ライセンスを設定してください。設定しない場合は、キックスタート構成ファイルに記載するライセンスが適用されます。キックスタート構成ファイルにもライセンスの設定がない場合は、評価モードで vCenter Server に登録されます。

ESXi 5 の場合は、キックスタート構成ファイルにライセンスを記載することはできません。

3. ネットワークを設定します。
グループプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブに仮想マシン用ネットワークの設定をしてください。
ネットワークの設定については、「3 論理ネットワークを利用した仮想ネットワーク構成」を参照してください。
4. DataCenter を設定します。
グループプロパティ設定の [全般] タブにある [データセンタ] プルダウンボックスに、SigmaSystemCenter に登録されている DataCenter の一覧が表示されます。その一覧の中から DataCenter を選択してください。スクリプトインストール完了後に SigmaSystemCenter が、設定した DataCenter に仮想マシンサーバを登録します。
DataCenter を新規に作成する場合、[仮想] ビューから行ってください。
5. ホストを作成します。
作成した仮想マシンサーバ用のグループのアイコンをクリックし、[ホスト一覧] グループボックスの [アクション] メニューから [ホスト追加] を選択し、ホストを追加してください。
6. ストレージを設定します。
ホスト設定の [ストレージ] タブからストレージを設定してください。

ストレージの設定については、「4 ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定」を参照してください。

7. ネットワークを設定します。

ホスト設定の [ネットワーク] タブにネットワークを追加してください。

NIC#1 の 1 番目に管理用ネットワーク (Service Console / Management Network) に設定する IP アドレスを設定してください。また、この IP アドレスを使って vCenter Server のインベントリに登録が行われます。

ESMPRO/ServerAgent で監視を行う場合、管理用 IP アドレスを設定してください。

NIC#1 の 1 番目以外に "VMKernel" に設定する IP アドレスを設定してください。指定した物理 NIC に仮想スイッチを作成し、その仮想スイッチ上に VMKernel が作成されます。この IP アドレスを設定しない場合、"VMKernel" は作成されません。また、複数の VMKernel が存在する場合は、設定したネットワーク情報の NIC 番号が小さい番号を優先し、そのネットワーク情報に一致する VMKernel を VMotion に使用します。

ESXi でこの IP アドレスを設定しない場合は、Management Network を VMotion に使用します。

なお、スクリプトインストールに使用する NIC が物理 NIC#1 ではない場合は、同じ NIC#1 に設定した管理用ネットワークと VMKernel のネットワーク情報は、同じ仮想スイッチに作成されません。管理用ネットワークはスクリプトインストールに使用した物理 NIC に接続されている仮想スイッチに作成され、VMKernel は [ネットワーク] タブで設定した物理 NIC に接続されている仮想スイッチに作成されます。

Host Configuration > Network

全般 ネットワーク ストレージ ソフトウェア マシンプロファイル ホストプロファイル データストア設定 死活監視

IPアドレスを設定してください。IPアドレスを設定しない場合、IPアドレス自動取得になります。

	NIC 番号	IPアドレス	サブネットマスク/サブネットプレフィックス長	デフォルトゲートウェイ	編集
<input type="checkbox"/>	1	172.16.0.3	255.240.0.0	172.16.0.2	
<input type="checkbox"/>	0	172.16.0.103	255.240.0.0	172.16.0.2	

管理用IPアドレス: 172.16.0.3

戻る

注:

・ ホストに設定したホスト名、およびホストプロファイルに設定したドメインサフィックスを使って、vCenter Server のインベントリに FQDN 形式で登録が行われます。IP アドレスで登録する場合は、下記のレジストリを設定してください。

[HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥WOW6432Node¥NEC¥PVM¥Provider¥VM¥VMware]

EnableIPSetting(REG_DWORD): 1

・ ご使用の環境によっては vCenter Server と仮想マシンサーバ (ESX) が通信可能になるまでに時間がかかり、スクリプトインストール完了後に行われる vCenter Server のインベントリ登録で「仮想マシンサーバ (サーバ名) の追加が失敗しました。」のメッセージが出力されて失敗する場合があります。このような場合は、下記のレジストリを設定し、リトライ回数を調整してください。

[HKEY_LOCAL_MACHINE¥Software¥WOW6432Node¥NEC¥PVM¥ActionSequence]

AddVMServerRetryCounter(REG_DWORD): リトライ回数

AddVMServerSleepTimer(REG_DWORD): リトライ間の待ち合わせ秒数

8. パスワードを設定します。

以下の 4 箇所のいずれかに設定してください。

- ・ グループプロパティ設定の [ホストプロファイル] タブ
- ・ モデルプロパティ設定の [ホストプロファイル] タブ
- ・ ホスト設定の [ホストプロファイル] タブ
- ・ ホスト設定の [全般] タブ

注: パスワードの優先順位は、ホスト設定の [ホストプロファイル] タブ、ホスト設定の [全般] タブ、モデルプロパティ設定の [ホストプロファイル] タブ、グループプロパティ設定の [ホストプロファイル] タブになります。この 4 箇所のいずれにもパスワードが設定されていない場合は、ESX を vCenter Server に登録できません。

9. スクリプトインストールのシナリオを登録します。

シナリオは、グループプロパティ設定、モデルプロパティ設定、ホスト設定、マシンプロパティ設定に設定できます。

シナリオを登録する際のソフトウェアの種類は、以下を指定してください。

- ・ グループプロパティ設定の場合 : 「稼動時」
- ・ モデルプロパティ設定の場合 : 「稼動時」
- ・ ホスト設定の場合 : 「稼動時・グループ配布前」、「稼動時」、「稼動時・グループ配布後」
- ・ マシンプロパティ設定の場合 : 「稼動時・グループ配布前」、「稼動時・グループ配布後」

シナリオをマシンごとに設定する場合は、ホスト設定、またはマシンプロパティ設定に登録してください。同じハードウェア構成のマシンが所属するグループごとに設定する場合は、グループプロパティ設定、およびモデルプロパティ設定に登録してください。

注:

- ・ スクリプトインストールのシナリオは、グループプロパティ設定、モデルプロパティ設定、ホスト設定、マシンプロパティ設定に多重に登録しないでください。スクリプトインストールに失敗します。
- ・ スクリプトインストールと同時に ESMPRO/ServerAgent のインストールシナリオや ESX のパッチをインストールするシナリオを配布する場合、シナリオの配布順はスクリプトインストールが先頭になるように設定してください。
- ・ スクリプトインストールのシナリオを、複数のサーバで共通のシナリオを使用する場合は、ESX をインストールするマシンのハードウェア構成が一致している必要があります。構成が一致していないマシンの場合、シナリオ配布時に意図しないディスクに対して、ESX がインストールされることで、ディスク上の仮想マシンが削除される場合があります。また、ESXi の場合はパーティション情報をコマンドで確認することができないため、共有ストレージ (SAN など) を接続する場合は、インストールするディスクのみを接続する設定を行ってください。詳細については「4 ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定」を参照してください。
- ・ 1 つのシナリオを使って、複数のサーバに対して同時にスクリプトインストールを実行した場合、OS 固有情報の反映が正しく行われず、スクリプトインストールに失敗します。複数同時に行う場合は、「5 ESX 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「6 ESXi 4.1 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「7 ESXi 5 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」に従って、キックスタート構成ファイルとブートパラメータファイルをそれぞれ用意し、DPM で複数同時に行う台数分のシナリオを作成してください。

関連情報: シナリオの配布順については、「SigmaSystemCenter リファレンスガイド 概要編」の「1.3.7 登録ソフトウェアの配布順序」を参照してください。

10. ポリシーを設定します。

ポリシーを設定することで、グループに登録した仮想マシンサーバに障害が発生した場合など、自動で仮想マシンサーバを追加して復旧することができます。

ポリシーの設定については、「2 ポリシーを利用した仮想マシンサーバ・プロビジョニング」を参照してください。

関連情報: ポリシーの設定は必須ではありません。運用に合わせて設定してください。

11. その他の項目は必要に応じて設定してください。

1.1.5. 仮想マシンサーバ・プロビジョニングの実行方法

仮想マシンサーバ・プロビジョニングを実行する方法は、手動で実行する方法と自動で実行する方法の2通りがあります。

注: 1つのシナリオを使って複数同時にマシン・仮想マシンサーバに対してスクリプトインストールを実行しないでください。複数同時に実行する場合は、複数のシナリオを作成し、1つのシナリオで1台のマシンに対してスクリプトインストールを実行してください。

- ◆ 手動で実行する場合は、物理マシン（仮想マシンサーバを含む）にリソース割り当て、もしくはスケールアウトを実行し、マシンを運用グループで移動する際に仮想マシンサーバ・プロビジョニングが実行されます。

関連情報:

- ・ リソース割り当てについては、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「7.2.2 ホストにリソースを割り当てるには」を参照してください。
 - ・ スケールアウトについては、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「7.5. スケールアウト」を参照してください。
-

- ◆ 自動で実行する場合は、グループ、またはモデルにポリシー設定を行います。イベントに対する復旧処理に [グループ操作 / グループマシン追加] の設定を行うことによってイベント契機による仮想マシンサーバ・プロビジョニングが実行されます。

関連情報: ポリシーについては、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.10. ポリシーを作成する」を参照してください。

1.1.6. ESX の構成変更

ESX にディスクの追加などハードウェア構成を変更すると、マシンの認識するディスクの順番が、登録しているキックスタート構成ファイルの設定と一致なくなり、インストールが正しく行われずに使用中のディスクが壊れる場合があります。

インストールの対象マシンのハードウェア構成を変更する場合は、以下の手順に従ってください。

注: ESXi の場合はパーティション情報をコマンドで確認することができないため、共有ストレージ (SAN など) を接続する場合は、インストールするディスクのみを接続する設定を行ってください。詳細については「4 ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定」を参照してください。

1. ESX の構成を変更します。

関連情報: ESX の構成を変更する方法は、VMware 社発行のマニュアルを参照してください。

2. 構成を変更した後、スクリプトインストールシナリオを再作成します。
3. 作成したシナリオを「1.1.4 SigmaSystemCenter の設定」の手順に従って、仮想マシンサーバ用のグループに再登録します。

<新たに SAN を接続する場合の変更例>

ローカルディスクのみで構成された ESX に SAN を接続する場合、以下の手順に従ってください。

4. ESX の構成を変更します。

ESX に SAN を接続後、パーティション情報を参照して ESX のインストールされているディスクを確認します。

パーティション情報は下記のコマンドで確認できます。

```
# fdisk -l
```

OS がローカルディスク (/dev/sda) にインストールされている ESX に SAN を接続すると、SAN デバイスが (/dev/sda) と認識され、ディスクの順番が変更される場合があります。

OS がインストールされているディスクを確認してください。

```
Disk /dev/sda: 47.2 GB, 47244640256 bytes
255 heads, 63 sectors/track, 5743 cylinders
Units = cylinders of 16065 * 512 = 8225280 bytes

   Device Boot      Start         End      Blocks   Id  System
/dev/sda1    *           1         5743   46130583+  fb  Unknown
```

```
Disk /dev/sdb: 300.0 GB, 300000000000 bytes
255 heads, 63 sectors/track, 36472 cylinders
Units = cylinders of 16065 * 512 = 8225280 bytes
```

```
   Device Boot      Start         End      Blocks   Id  System
/dev/sdb1    *           1          13     104391    83  Linux
/dev/sdb2                14          650   5116702+   83  Linux
/dev/sdb3                651       36136  285041295   fb  Unknown
/dev/sdb4           36137       36472   2698920    f  Win95 Ext'd (LBA)
/dev/sdb5           36460       36472    104391    fc  Unknown
/dev/sdb6           36137       36205    554179+   82  Linux swap
/dev/sdb7           36206       36459   2040223+   83  Linux
```

5. スクリプトインストールシナリオを再作成します。

詳細な作成手順については、「5 ESX 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「6 ESXi 4.1 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成」、「7 ESXi 5 自動インストール (スクリプトインストール)用シナリオ作成」を参照してください。

6. 作成したスクリプトインストールシナリオを再登録します。

作成したシナリオを「1.1.4 SigmaSystemCenter の設定」に従って、仮想マシンサーバ用のグループに再登録してください。

1.1.7. 注意・制限事項

- ◆ スクリプトインストールで、セカンダリ DNS、ターシャリ DNS の設定は反映されません。設定が必要な場合、スクリプトインストール後、ESX に個別に設定してください。
- ◆ スクリプトインストールでは、キックスタート構成ファイルに記述している設定内容に従って自動的にインストールが行われます。

ハードディスクの追加、ネットワークアダプタの追加などハードウェア構成の変更を行った場合は、ESX / ESXi のデバイスを認識する順番が変わる場合があります。そのため、ハードウェア構成を変更する前のシナリオを使ってスクリプトインストールを行うと、インストールが正しく行われずに意図しないディスクに対して、ESX / ESXi がインストールされることで、既に存在するディスク領域が誤ってフォーマットされ、ディスク上の仮想マシンが削除される場合があります。

ハードウェア構成を変更した場合は、必ずシナリオを再作成してください。

また、シナリオを実行するマシンは、シナリオの作成元となったマシンと同じハードウェア構成のマシンに対してのみ実行してください。

また、ESXi の場合はパーティション情報をコマンドで確認することができないため、共有ストレージ (SAN など) を接続する場合は、インストールするディスクのみを接続する設定を行ってください。詳細については、「4 ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定」を参照してください。
- ◆ スクリプトインストール開始時にネットワーク障害などで NFS サーバのマウントに失敗し、スクリプトインストールがタイムアウトする場合があります。

失敗した場合は、SigmaSystemCenter からシナリオ配布のジョブの実行をキャンセルし、マシンの電源をオフにした後、処理を再実行するか、スクリプトインストール対象のマシンを操作して NFS サーバとマウントポイントを指定し、処理を続行してください。
- ◆ 同じマシンに対してスクリプトインストールを実行すると、SigmaSystemCenter 上でマシンの NIC 一覧に、存在しない NIC が表示される場合があります。

この場合は、以下の手順で削除してください。

ESX のコンソール上で下記コマンド実行し、すべてのネットワークアダプタの MAC アドレスを確認してください。

```
# ifconfig
```

SigmaSystemCenter の [リソース] ビューからマシンの [プロパティ] を表示し、[ネットワーク] タブで存在しない MAC アドレスのネットワークアダプタを削除してください。
- ◆ 仮想マシンサーバに対して、「リソース割り当て」を行う場合、仮想マシンサーバ上に仮想マシン、またはテンプレートが存在すると失敗します。
- ◆ 仮想マシンサーバに対して、「用途変更」を行う場合、仮想マシンサーバ上に仮想マシンまたはテンプレートが存在すると失敗します。

- ◆ 仮想マシンサーバ・プロビジョニングは、スクリプトインストールに使用する物理 NIC を管理用 LAN とし、その LAN 上に DPM、NFS サーバが存在する必要があります。また、PXE ブートで使用する物理 NIC が管理 LAN に接続されている必要があります。
- ◆ VMware ESXi のスクリプトインストール後に CD ドライブのトレイが開く場合があります。
- ◆ スクリプトインストールを行うマシンのネットワークセグメント内に複数の DPM サーバが存在していた場合、誤動作の原因となります。

2. ポリシーを利用した仮想マシンサーバ・プロビジョニング

ESX / ESXi が稼動するグループにポリシーを設定することにより、ESX / ESXi で障害が発生した場合に、代替マシンを作成することが可能です。

ESX / ESXi のアクセス不可障害を契機に、プールマシンに仮想マシンサーバ・プロビジョニングを行うための手順を説明します。

概略手順

1. ポリシーの設定
2. 追加マシン用のホスト設定の作成
3. プールへのマシン追加
4. ポリシーの有効化

注: 本機能を使用する場合は、本番業務開始前の評価段階で本機能の有効性を十分に検証した上で行ってください。

1. ポリシーの設定

関連情報: ポリシーの設定方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.10. ポリシーを作成する」を参照してください。

- VMware ESX の場合

"標準ポリシー (仮想マシンサーバ)" のポリシープロパティ設定の [監視イベント] タブから「ターゲットアクセス不可」に以下の復旧アクションを追加します。

- グループ操作 / スケールアウト マシン追加

必要に応じて、標準ポリシー (仮想マシンサーバ) を複製してください。

ポリシー規則名「ターゲットアクセス不可」にアクション「グループ操作 / スケールアウト マシン追加」を追加します。また、アクション「グループ操作 / スケールアウト マシン追加」のアクションパラメータ詳細画面でアクションの実行条件を Completed に変更します。

ポリシー規則設定(編集)

ポリシー規則名: ターゲットアクセス不可

対象処置情報: 稼働中のVMを移動

イベントの選択

単一のイベントを指定する

区分全てのイベントを対象とする

複数のイベントを選択して条件を設定する

イベント区分: []

通報元: []

イベントID: []

複数イベント条件: 排他抑制

A群イベント一覧: [Source]ESMDSVNT [ID]x0000002(2) [Summary]サーバアクセス不能 マシンへのアクセスに失敗しました。

待ち合わせ時間: 0

B群イベント一覧: []

イベントに対するアクション

No.	ラベル	実行条件	アクション
<input type="checkbox"/> 1		Success	通報 / E-mail通報、イベントログ出力
<input type="checkbox"/> 2		Success	マシン設定 / ステータス設定 故障
<input type="checkbox"/> 3		Success	マシン操作 / マシン診断・強制OFF
<input type="checkbox"/> 4		Success	VMS操作 / 稼働中のVMを移動(Migration, Failover)
<input type="checkbox"/> 5		Completed	グループ操作 / スケールアウト マシン追加

[アクションの追加]

適用 戻る

- スタンドアロン ESXi 環境の VMware ESXi の場合
ESXi 用のポリシーを新規作成し、アクション「グループ操作 / スケールアウト マシン追加」を含めたアクションの設定を行います。
1. ポリシーの追加でテンプレート "標準ポリシー(仮想マシンサーバスタンドアロン ESXi)" を指定してポリシーを作成します。
 2. ポリシー規則名「VMS アクセス不可」にアクション「グループ操作 / スケールアウト マシン追加」を追加します。また、アクション「グループ操作 / スケールアウト マシン追加」のアクションパラメータ詳細画面でアクションの実行条件を Completed に変更します。

ポリシー規則設定(編集)

ポリシー規則名: VMSアクセス不可

対象処置情報: VMS上の全VM移動

イベントの選択

単一のイベントを指定する
 区分全てのイベントを対象とする
 複数のイベントを選択して条件を設定する

イベント区分: マシンアクセス不可能障害

通報元: StandaloneEsxProvider

イベントID: Alarm Host connection state on VMS changed from green to red

イベントに対するアクション

No.	ラベル	実行条件	アクション
<input type="checkbox"/>	1	Success	通報/ E-mail通報、イベントログ出力
<input type="checkbox"/>	2	Success	マシン設定/ ステータス設定 故障
<input type="checkbox"/>	3	Success	マシン操作/ マシン診断・強制OFF
<input type="checkbox"/>	4	Success	VMS操作/ 全VMを移動(Failover)
<input type="checkbox"/>	5	Completed	グループ操作/ スケールアウト マシン追加

| アクションの追加 |

適用 戻る

関連情報: イベントに対する復旧処理のアクションは上から順に実行されます。アクションの実行順序は運用状態により変更してください。

また、ポリシー契機により仮想マシン移動を行うには、仮想マシンが管理状態となっている必要があります。管理状態にする方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「9.2.3 仮想マシンを追加登録するには」を参照してください。

2. 追加マシン用のホスト設定の作成

ESX のアクセス不可障害を契機に追加されるマシン用にホスト設定を作成します。グループプロパティ設定の [ホスト] タブから追加してください。

作成方法については、本書「1.1.4 SigmaSystemCenter の設定」の手順 4、手順 5 を参照してください。

注: ポリシーを契機としたマシン追加では、グループにある未使用のホスト設定が使用されます。「ターゲットアクセス不可」を検知したマシンとは異なるホスト設定で稼動するため、ホスト名、IP アドレスなどホスト情報を引き継ぐことはできません。

3. プールへのマシン追加

復旧処理 [グループ操作 / スケールアウト マシン追加] によりマシンの追加を行うには、事前にグループのプールにマシンを追加する必要があります。

マシンを [リソース] ビューから [マシン登録] を行った後、[運用] ビューの [プールに追加] を実行してください。

関連情報:

- ・ マシンをリソースに登録するには、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「9.2.1 物理マシンを追加登録するには」を参照してください。
 - ・ プールにマシンを追加するには、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「7.1. プールにマシンを追加する」を参照してください。
-

4. ポリシーの有効化

ESX を稼動させるグループ、または VM サーバモデルに、手順 1「ポリシーの設定」で変更したポリシーを設定してポリシーの有効化を行います。グループプロパティ設定・VM サーバモデルのモデルプロパティ設定の [全般] タブから [ポリシー名] を設定することにより、ポリシーが有効化されます。

関連情報: グループの設定方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「5.5. グループプロパティを設定する」、モデルの設定方法については、「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「5.8. モデルプロパティを設定する (仮想マシンサーバの場合)」を参照してください。

以上で、ポリシーを利用した仮想マシンサーバ・プロビジョニングの設定は完了です。

3. 論理ネットワークを利用した仮想ネットワーク構成

グループ、または VM サーバモデルに論理ネットワークを設定することで、仮想マシンサーバのリソース割り当てやマシンの置換 / 用途変更、マスタマシン登録、スケールアウトなどを行うときに、物理 NIC の冗長化や仮想スイッチと仮想ポートグループを作成することができます。

構成例

1. 管理用 LAN を冗長化する場合
2. 業務用 LAN を冗長化する場合
3. 管理用 LAN と業務用 LAN を冗長化する場合
4. 業務用 LAN に VLAN ID を設定する場合
5. 論理ネットワークを設定しない場合

注:

- ・ vmnic に割り当てられる物理 NIC は、手動インストールとスクリプトによる自動インストールで、ハードウェアにより異なる場合があるため、ご使用の環境に合わせて設定してください。
- ・ 分散仮想スイッチを自動作成する機能はありません。そのため、仮想マシン用のネットワークに分散仮想スイッチを使用する場合は vCenter Server にあらかじめ作成し、論理ネットワークを設定してください。

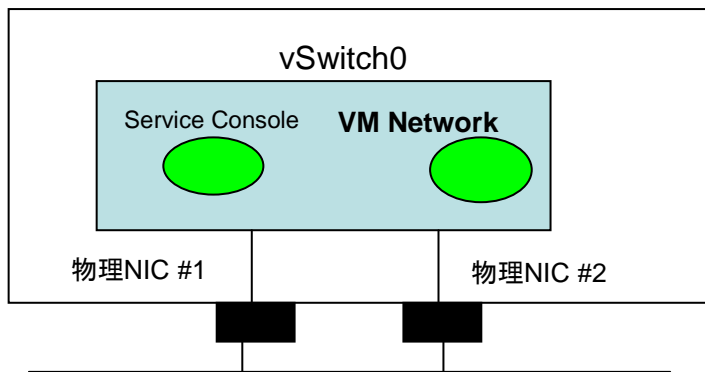
また、管理用仮想ポートを分散スイッチに作成できないため、管理用の物理 NIC に分散スイッチを指定することはできません。

関連情報: 詳細な論理ネットワーク、ネットワークの設定方法については「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「4.4.6 論理ネットワークを追加するには」、「5.5.6 [ネットワーク設定] タブを設定するには」を参照してください。

3.1.1. 管理用 LAN を冗長化する場合

スクリプトインストールを実行することで管理用仮想ポートグループ "Service Console" / "Management Network" は仮想スイッチ "vSwitch0" に作成されます。また、仮想スイッチ "vSwitch0" には物理 NIC#1 が接続されます。

物理 NIC#1 と物理 NIC#2 を仮想スイッチ "vSwitch0" に接続して冗長化し、下記の構成を作成します。



1. 論理ネットワークの作成

仮想マシン用の仮想ポートグループ "VM Network" を作成して管理用 LAN の冗長化設定をします。

[リソース] ビューのネットワーク追加画面で VLAN 定義に VLAN 名 "VM Network" の設定があるネットワークを追加します。

The screenshot shows the 'VLAN(ポートグループ)定義追加' (Add VLAN (Port Group) Definition) dialog box. The 'スイッチ' (Switch) dropdown is set to '仮想スイッチ' (Virtual Switch). The 'スイッチ名' (Switch Name) field is empty. Under 'VLAN(ポートグループ)指定' (VLAN (Port Group) Specification), the '新規' (New) radio button is selected, and the 'VM Network' text is entered in the adjacent field. The 'VLAN種別' (VLAN Type) dropdown is set to 'なし' (None), and the 'VLAN ID' field is empty. At the bottom, there are 'OK' and 'キャンセル' (Cancel) buttons.

論理ネットワーク編集

名前: VM_Network

タグ:

公開範囲: Public Private

グループへの割り当て: 設定なし

説明:

VLAN(ポートグループ)定義: アドレス プール | ファイアウォール

VLAN(ポートグループ)定義一覧

<input type="checkbox"/>	スイッチ名	VLAN(ポートグループ)名	VLAN 種別	VLAN ID
<input type="checkbox"/>		VM Network	なし	

OK | キャンセル

2. ネットワークの設定

グループ、または VM サーバのモデルプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで冗長化する物理 NIC#1 と物理 NIC#2 が VLAN "VM Network" に接続するように設定をします。

モデルプロパティ設定

全般 | ストレージ | ソフトウェア | VM最適配置 | VM配置制約 | データストア設定 | **ネットワーク設定** | ホストプロファイル | 死活監視 | 性能監視

ネットワーク一覧

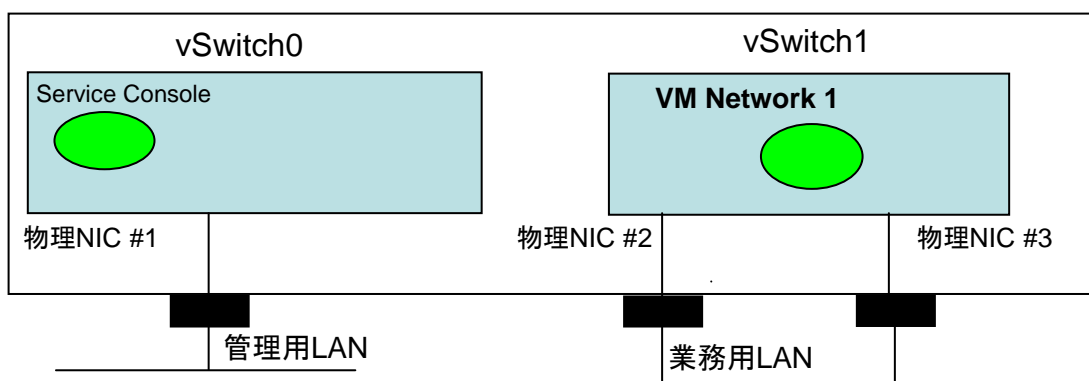
<input type="checkbox"/>	NIC 番号	ネットワーク	スイッチ	VLAN(ポートグループ)	タグ
<input type="checkbox"/>	1,2	VM_Network		VM Network	

戻る

3.1.2. 業務用 LAN を冗長化する場合

スクリプトインストールを実行することで管理用仮想ポートグループ "Service Console" / "Management Network" は仮想スイッチ "vSwitch0" に作成されます。また、仮想スイッチ "vSwitch0" には物理 NIC#1 が接続されます。

業務用 LAN を冗長化するには、仮想スイッチを追加して物理 NIC を接続する必要があります。本設定を行うことで、仮想スイッチ "vSwitch1" に物理 NIC#2、物理 NIC#3 を接続し、下記の構成を作成します。



1. 論理ネットワークの作成

[リソース] ビューのネットワーク追加画面で VLAN 定義に VLAN 名 "VM Network 1" の設定があるネットワークを追加します。

VLAN(ポートグループ)定義追加

スイッチ

ヒント: VLANを適用するスイッチを選択します。「全スイッチ(物理)」は「マシンプロパティの「ネットワーク」タブに設定された物理スイッチに適用されます。

スイッチ名

ヒント: 利用できる仮想スイッチがない場合、設定した名前の仮想スイッチを作成します。スイッチ名を指定しない場合は、システムによって自動で名前が決められます。

VLAN(ポートグループ)指定

選択

新規

VLAN種別

VLAN ID

OK キャンセル

論理ネットワーク編集

名前

タグ

公開範囲 Public Private

グループへの割り当て

説明

VLAN(ポートグループ)定義 | アドレス プール | ファイアウォール

VLAN(ポートグループ)定義一覧

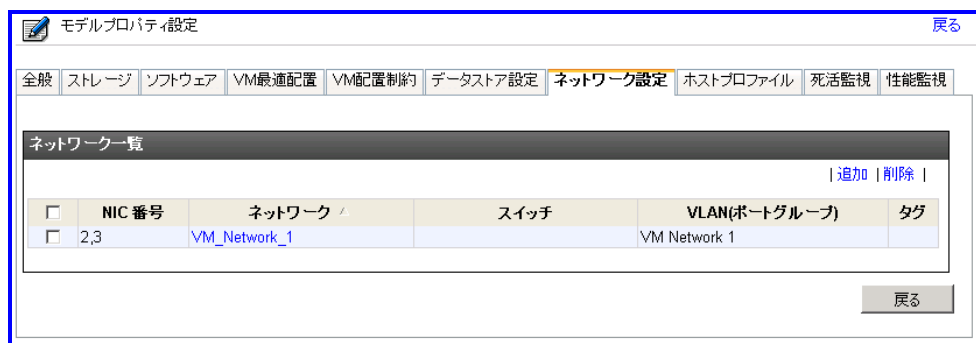
<input type="checkbox"/>	スイッチ名	VLAN(ポートグループ)名	VLAN 種別	VLAN ID
<input type="checkbox"/>		VM Network 1	なし	

追加 | 削除

OK キャンセル

2. ネットワークの設定

グループ、または VM サーバのモデルプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで冗長化する物理 NIC#2 と物理 NIC#3 が VLAN "VM Network 1" に接続するように設定をします。

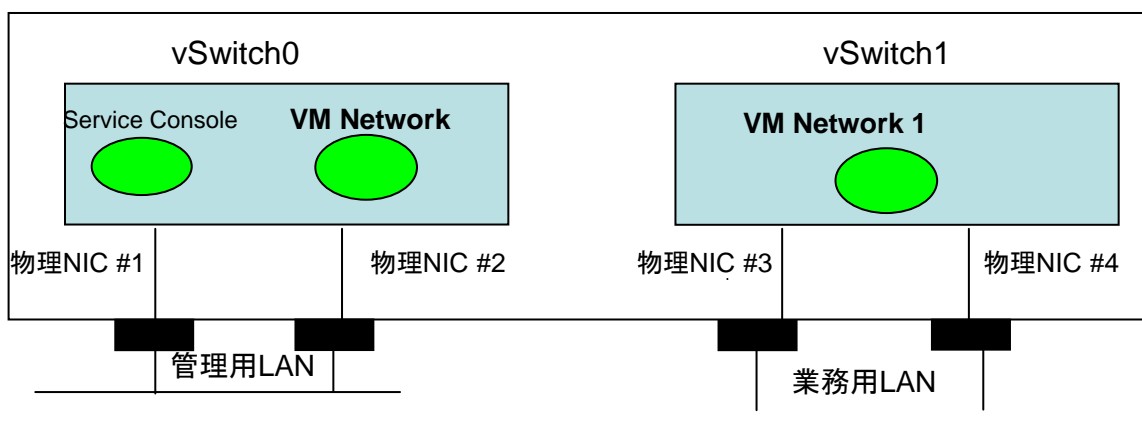


3.1.3. 管理用 LAN と業務用 LAN を冗長化する場合

スクリプトインストールを実行することで管理用仮想ポートグループ "Service Console" / "Management Network" は仮想スイッチ "vSwitch0" に作成されます。また、仮想スイッチ "vSwitch0" には物理 NIC#1 が接続されます。

物理 NIC#2 を仮想スイッチ "vSwitch0" に接続して管理用 LAN を冗長化します。

仮想スイッチ "vSwitch1" を作成し、物理 NIC#3、物理 NIC#4 を接続して業務用 LAN を冗長化する下記の構成を作成します。



1. 論理ネットワークの作成

前々項「3.1.1 管理用 LAN を冗長化する場合」と前項「3.1.2 業務用 LAN を冗長化する場合」で作成した論理ネットワークを作成します。

2. ネットワークの設定

グループ、または VM サーバのモデルプロパティ設定の [ネットワーク設定] タブで冗長化する物理 NIC#1 と物理 NIC#2 が VLAN "VM Network" に接続するように設定をします。

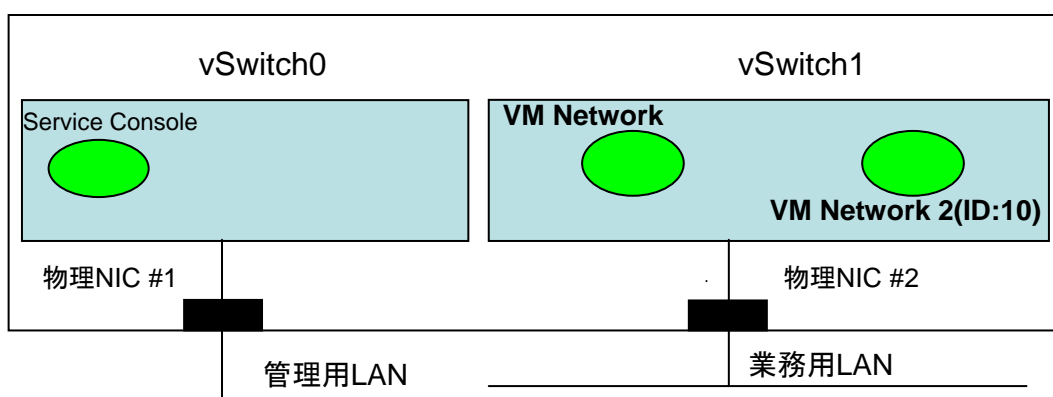
また、物理 NIC#3 と物理 NIC#4 が VLAN "VM Network 1" に接続するように設定をします。



3.1.4. 業務用 LAN に VLAN ID を設定する場合

スクリプトインストールを実行することで管理用仮想ポートグループ "Service Console" / "Management Network"は仮想スイッチ "vSwitch0" に作成されます。また、仮想スイッチ "vSwitch0" には物理 NIC#1 が接続されます。

仮想スイッチ "vSwitch1" を作成し、業務用 LANにある仮想マシン用の仮想ポートグループ "VM Network 2" を作成し、VLAN ID を設定して下記の構成を作成します。



1. 論理ネットワークの作成

[リソース] ビューのネットワーク追加画面で VLAN 定義に VLAN 名 "VM Network 2"、VLAN ID "10" の設定があるネットワークを追加します。

VLAN(ポートグループ)定義追加

スイッチ: 仮想スイッチ

ヒント: VLANを適用するスイッチを選択します。「全スイッチ(物理)」は「マシンプロパティ」の「ネットワーク」タブに設定された物理スイッチに適用されます。

スイッチ名:

ヒント: 利用できる仮想スイッチがない場合、設定した名前の仮想スイッチを作成します。スイッチ名を指定しない場合は、システムによって自動で名前が決まります。

VLAN(ポートグループ)指定

選択: なし

新規: VM Network 2

VLAN種別: VLAN

VLAN ID: 10

OK キャンセル

論理ネットワーク編集

名前: VM_Network_2

タグ:

公開範囲: Public Private

グループへの割り当て: 設定なし

説明:

VLAN(ポートグループ)定義 | アドレス プール | ファイアウォール

VLAN(ポートグループ)定義一覧

<input type="checkbox"/>	スイッチ名	VLAN(ポートグループ)名	VLAN 種別	VLAN ID
<input type="checkbox"/>		VM Network 2	VLAN	10

| 追加 | 削除 |

| 追加 | 削除 |

OK キャンセル

2. ネットワークの設定

業務用 LAN の物理 NIC#2 に VLAN "VM Network" と VLAN "VM Network 2" が接続するように設定します。



3.1.5. 論理ネットワークを設定しない場合

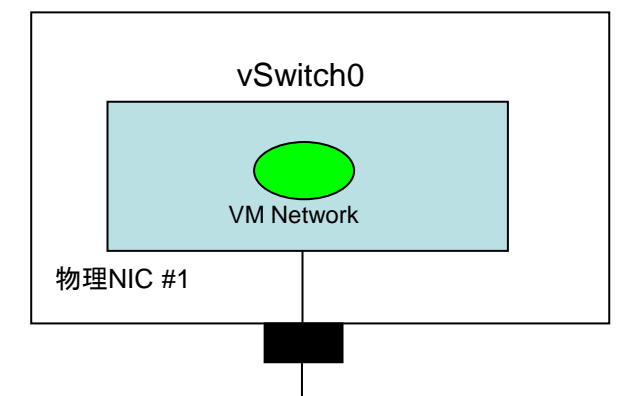
論理ネットワークを設定しない場合は、仮想マシン用ネットワークは作成されません。下記のレジストリを設定することで以下の構成で仮想マシン用のネットワークを作成します。

キー: [HKLM\SOFTWARE\WOW6432Node\NEC\PVM\Provider\VM\VMware]

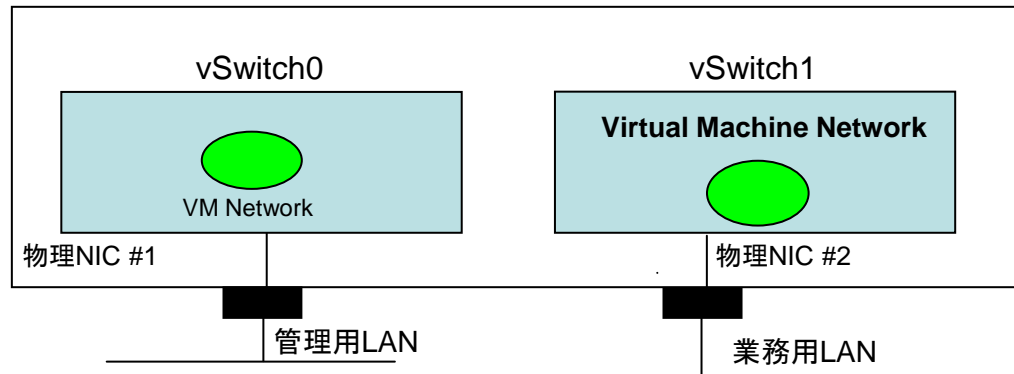
値: EnableDefaultVmPortgroup (DWORD:1)

以下の構成からネットワーク構成を変更する場合は、仮想マシンサーバ・プロビジョニング後に手動で設定してください。

- ◆ 物理 NIC が 1 枚で、管理用、および業務用 LAN を兼用する構成の場合
物理 NIC#1 に接続している仮想スイッチ "vSwitch0" (スクリプトインストール時に作成される) に、仮想マシン用の仮想ポートグループ "VM Network" を作成します。



- ◆ 物理 NIC が 2 枚で、1 枚目が管理用 LAN、2 枚目が業務用 LAN の構成の場合
物理 NIC#1 に接続している仮想スイッチ "vSwitch0" (スクリプトインストール時に作成される) に、仮想マシン用の仮想ポートグループ "VM Network" を作成します。
物理 NIC#2 に接続する仮想スイッチ "vSwitch1" を作成します。
作成した仮想スイッチ "vSwitch1" に、仮想マシン用の仮想ポートグループ "Virtual Machine Network" を作成します。



4. ディスクボリュームの接続制御を利用した共有データストアの設定

ホスト設定にストレージを設定することで、仮想マシンサーバのリソース割り当てやマシンの置換 / 用途変更、マスタマシン登録、スケールアウトなどを行うときに、ESX / ESXi をインストールするディスクやデータストアとして使用するディスクの制御を行うことができます。

ディスクボリュームの接続を制御することでスクリプトインストール時は ESX / ESXi をインストールするディスクのみ接続し、データストアとして使用するディスクを非接続にすることでインストールに使用するディスクを特定することができ、誤って既存のデータストアがフォーマットされることがなくなります。

ストレージを設定しない場合は、キックスタート構成ファイル内で ESX / ESXi をインストールするディスクを正しく指定する必要があります。

構成例

1. ローカルディスクにインストールする場合
2. SAN の LUN にインストールする場合

注: 共有データストアを設定する場合は、[ストレージ] タブに設定するディスクの順番とディスクボリュームの組み合わせをすべてのホスト設定で同じ設定にしてください。同じ設定でない場合は共有データストアとして使用できません。

関連情報: 詳細なストレージの設定方法については「SigmaSystemCenter コンフィグレーションガイド」の「5.9.3 [ストレージ] タブを設定するには」を参照してください。

4.1.1. ローカルディスクにインストールする場合

ESX / ESXiをローカルディスクにインストールし、SANのLUNをデータストアとして使用するよう構成します。

ローカルディスクが複数ある場合は、キックスタート構成ファイル内でインストールするディスクを正しく指定する必要があります。

1. マシンの HBA 設定

ESX / ESXi のインストール対象のマシンに装着されている HBA 番号を設定します。

[リソース] ビューからマシンプロパティ設定の [ストレージ] タブで HBA 番号を設定します。



2. HBA に割り当てるディスクを設定

稼動するときに HBA 番号に割り当てるディスクを設定します。

[運用] ビューからホスト設定の [ストレージ] タブで割り当てるディスクを [配布後に接続] にチェックを入れて設定します。



[配布後に接続] にチェックがあるディスクは ESX / ESXi がインストールされた後に割り当てるため、これらのディスクに ESX / ESXi がインストールされることはありません。

4.1.2. SAN の LUN にインストールする場合

ESX / ESXi を SAN の LUN にインストールするように構成します。

ローカルディスクがある場合は、キックスタート構成ファイル内でインストールするディスクを正しく指定する必要があります。

1. マシンの HBA 設定

ESX / ESXi のインストール対象のマシンに装着されている HBA 番号を設定します。

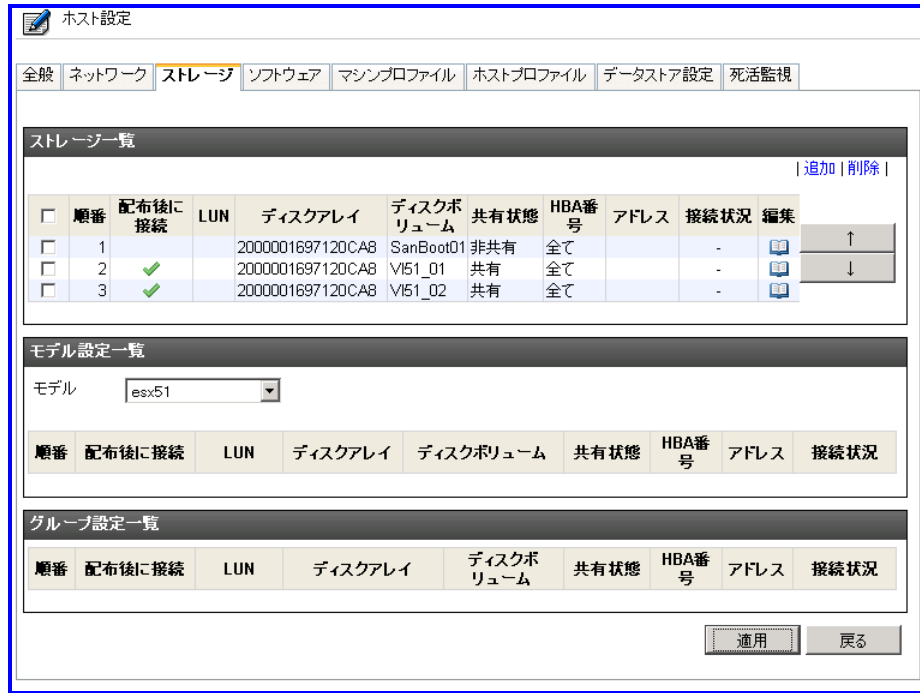
[リソース] ビューからマシンプロパティ設定の [ストレージ] タブで HBA 番号を設定します。



2. HBA に割り当てるディスクを設定

稼動するときに HBA 番号に割り当てるディスクボリュームを設定します。

[運用] ビューからホスト設定の [ストレージ] タブでデータストアとして使用するディスクを [配布後に接続] にチェックを入れて設定します。



ホスト設定

全般 ネットワーク **ストレージ** ソフトウェア マシンプロファイル ホストプロファイル データストア設定 死活監視

ストレージ一覧 | 追加 | 削除 |

<input type="checkbox"/>	順番	配布後に接続	LUN	ディスクアレイ	ディスクボリューム	共有状態	HBA番号	アドレス	接続状況	編集
<input type="checkbox"/>	1			2000001697120CA8	SanBoot01	非共有	全て		-	
<input type="checkbox"/>	2	<input checked="" type="checkbox"/>		2000001697120CA8	V151_01	共有	全て		-	
<input type="checkbox"/>	3	<input checked="" type="checkbox"/>		2000001697120CA8	V151_02	共有	全て		-	

モデル設定一覧

モデル

順番	配布後に接続	LUN	ディスクアレイ	ディスクボリューム	共有状態	HBA番号	アドレス	接続状況
----	--------	-----	---------	-----------	------	-------	------	------

グループ設定一覧

順番	配布後に接続	LUN	ディスクアレイ	ディスクボリューム	共有状態	HBA番号	アドレス	接続状況
----	--------	-----	---------	-----------	------	-------	------	------

ESX / ESXi のインストール時には [配布後に接続] にチェックがないディスクのみ接続され、インストールに使用されます。インストールが完了した後に [配布後に接続] にチェックがあるディスクが接続されます。

5. ESX 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成

ESX の自動インストールを行うには、DPM に ESX のクリアインストールシナリオを登録後、SigmaSystemCenter に登録し、自動インストールを行うグループに対して、配布ソフトウェアとして追加してください。

概略手順

1. DPM のセットアップ
2. ESX のキックスタート構成ファイル作成
3. ESX のブートパラメータファイル作成
4. DPM に OS インストールシナリオ登録

注: 本ソリューションガイドに記載しているキックスタート構成ファイルのスクリプトは、サンプルとしての提供です。ご使用の環境に合わせたカスタマイズ、および動作検証を十分に行った上で引用してください。

また、概略手順の 1.~3.まではファイルの配置を手動で行うものがあります。手順実施後は以下のフォルダ構成になっているかを確認してください。

<DPM イメージ格納用フォルダ>

- + exports
 - + ks
 - esxks.cfg (任意の名前)
 - + AnsFile
 - + linux
 - esx (任意の名前)
-

5.1.1. DPM のセットアップ

DPM のセットアップを行います。また、ESX 自動インストールを行う場合、NFS サーバの構築が必要となります。

注: NFS サーバと DPM 管理サーバは同じマシンにインストールしてください。

NFS サーバの構築については、「DeploymentManager インストールガイド」の「付録 C NFS サーバを構築する」を参照してください。

DPM の NFS 共有フォルダは、「DPM イメージ格納用フォルダ¥exports」になります。DPM イメージ格納用フォルダは DPM の Web コンソールから確認できます。既定値は「C:¥Deploy」になります。

1. ESX インストールカーネルの準備

1. ネットワークブート時にロードされるネットワークインストール用のミニカーネルを準備します。
ESX インストール CD に格納されている (/isolinux/vmlinuz)、および (/isolinux/initrd.img) を使用します。
2. 管理サーバ、もしくはリモートイメージビルダーをインストールしたマシンに適切なフォルダ (例: C:¥Temp) を作成し、上記のミニカーネルを、作成したフォルダにコピーします。

なお、上記の手順は必須ではなく、「2 ESX インストール CD をイメージビルダーで登録」手順内で CD-ROM 中のフォルダを直接指定することも可能です。

2. ESX インストール CD をイメージビルダーで登録

イメージビルダーを起動して、[オペレーティングシステムの登録] を行います。

オペレーティングシステム名	esx		
オペレーティングシステム種別	RedHat Enterprise Linux 3,4,5/ VMware ESX/ Citrix XenServer		
initrd.img/vmlinuzのフォルダ	C:¥Temp	参照(B)	
CD-ROMのソースフォルダ	D:¥	参照(B)	
		OK	キャンセル

1. [オペレーティングシステム名] テキストボックスに ESX イメージファイル名を入力します。任意の文字を入力してください。
ここで登録したオペレーティングシステム名は、「5.1.3 ESX のキックスタート構成ファイルの編集」、「5.1.4 ESX のブートパラメータファイル作成」手順で必要となるため、記録しておいてください。上記例の場合は、"esx" を記録しておきます。
2. [オペレーティングシステム種別] プルダウンボックスより [RedHat Enterprise Linux 3、4、5 / VMware ESX / Citrix XenServer] を選択します。
3. [initrd.img / vmlinuz のフォルダ] テキストボックスに、initrd.img、vmlinuz が格納されているフォルダを指定します。
4. [CD-ROM のソースフォルダ] テキストボックスに、ESX インストール CD、または ESX インストール CD の内容をコピーしたフォルダを指定します。

5.1.2. ESX のキックスタート構成ファイルの作成

キックスタート構成ファイルを作成するために、ESX のインストール媒体から対話形式でインストールを行い、キックスタート構成ファイルを作成してください。

関連情報: 詳細については、VMware 社が発行の「ESX および vCenter Server インストールガイド」の「VMware ESX のインストール」を参照してください。

1. ESX のインストール

スクリプトインストールを行うマシンと同じ構成のマシンに対してインストール媒体から ESX のインストールをしてください。

2. キックスタート構成ファイルのダウンロード

作成したキックスタートファイルを管理サーバにダウンロードします。

1. ESX のサービスコンソールにログインします。
2. キックスタート構成ファイル (/root/ks.cfg) をデータストア (/vmfs/volumes/データストア名) にコピーします。

```
cp /root/ks.cfg /vmfs/volumes/データストア名/
```

3. ブラウザで [https://ESX の IP アドレス/folder](https://ESXのIPアドレス/folder) にアクセスし ha-datacenter、データストア名、ks.cfg ファイルを順に辿って、キックスタート構成ファイルをダウンロードします。

ダウンロードした後はコピーした ks.cfg ファイルを削除してください。

3. NFS サーバの指定

注: ファイルの保存時には改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

ダウンロードしたファイル内の下記の箇所を変更します。

```
Install cdrom
```

[install] のオプションにインストールメディアを指定してください。

NFS サーバの IP アドレスと DPM のイメージ格納用フォルダ (/exports/「DPM のセットアップ」の手順 2「ESX インストール CD をイメージビルダーで登録」で指定した [オペレーティングシステム名]) を指定してください。

```
install url nfs://192.168.1.3/exports/esx/
```

4. インストールするディスクの設定

ESX をインストールするディスクは、環境に合わせて正しく設定してください。

注: ファイルの保存時には改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

ダウンロードしたファイル内の下記の箇所を変更します。

```
# Canonical drive names:  
clearpart --drives=naa.5000c500072595e7
```

[clearpart] のオプションの [--drives] にインストールするディスクを指定してください。また、[-overwritevmfs] を追記します。

```
# Canonical drive names:  
clearpart --drives=/dev/sda --overwritevmfs
```

また、パーティションを作成する箇所を変更します。

[part] で指定されている [--ondisk] オプションに上記と同じディスクを指定してください。

```
part '/boot' --fstype=ext3 --size=1100 --ondisk=/dev/sda
```

注: [--drives]、[--ondisk] に指定するディスクを誤った場合、スクリプトインストールで意図しないディスクに ESX がインストールされることで、既に存在するディスク領域が誤ってフォーマットされ、ディスク上の仮想マシンが削除される場合があります。

5. ライセンスキーのシリアル番号の設定

ダウンロードしたファイル内の下記の箇所を追記・変更します。

```
vmserialnum --esx=*****_*****_*****_*****_*****
```

[vmserialnum] のオプション [esx] に ESX が使用するシリアル番号を指定してください。
[vmserialnum] を設定しない場合、ESX は評価モードで vCenter Server に登録されません。

6. インストール後に再起動をする設定

ダウンロードしたファイル内に追記します。

```
Reboot
```

7. ファイアウォールの設定

ダウンロードしたファイル内に追記します。

```
firewall --allowOutgoing
```

作成したキックスタート構成ファイルの内容は下記ようになります。

```
accepteula

keyboard jp106

auth --enablemd5 --enablesshadow

# Canonical drive names:
clearpart --drives=/dev/sda --overwritevmfs

# Uncomment the esxlocation line and comment out the clearpart
# and physical partitions to do a non-destructive reinstall.
#esxlocation --uuid=fb44027c-2499-4519-9d31-01e414525141

install url nfs://192.168.1.3/exports/esx/

rootpw --iscrypted $1$R6irhp.8$ByBljniF2un7C/olr2BvS/
```

```

timezone --utc 'Asia/Tokyo'

vmserialnum --esx=*****_*****_*****_*****_*****

network --addvmportgroup=false --device=vmnic0 --bootproto=dhcp

part '/boot' --fstype=ext3 --size=1100 --ondisk=/dev/sda
part 'none' --fstype=vmkcore --size=110 --ondisk=/dev/sda
part 'Storage1' --fstype=vmfs3 --size=8720 --grow --ondisk=/dev/sda

virtualdisk 'esxconsole' --size=7720 --onvmfs='Storage1'

part 'swap' --fstype=swap --size=716 --onvirtualdisk='esxconsole'
part '/var/log' --fstype=ext3 --size=2000 --onvirtualdisk='esxconsole'
part '/' --fstype=ext3 --size=5000 --grow --onvirtualdisk='esxconsole'

reboot
firewall --allowOutgoing

%post --interpreter=bash

```

5.1.3. ESX のキックスタート構成ファイルの編集

1. DPM クライアントインストールスクリプトの追記

vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを使用して、上記で作成したキックスタートファイルの %post の下に DPM クライアントインストールスクリプトを追記します。追記部分は以下の通りです。

注:

- ・ ファイルの保存時には改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

- ・ 追記部分内の firewall open の 68 以外のポートは、DPM サーバに設定したポート番号に合わせて修正する必要があります。

DPM サーバに設定したポート番号は以下のファイルで確認できます。

「TFTP ルートフォルダ¥Port.ini」

TFTP ルートフォルダの既定値は、「DPM のインストールフォルダ¥PXE¥Images」となります。

キー名	既定値	
	DPM サーバ新規インストールの場合	DPM サーバアップグレードインストールの場合
ReceiveClientInfo	26504	56011
ShutdownReboot	26509	56010
RemoteUpdateUnicast	26510	56000
RemoteUpdateMulticast	26529	56001

- ・ 追記部分内の NFSSERVER と DPMSERVER は、環境に合わせて修正する必要があります。
- ・ DPM クライアントは rc スクリプトで起動時にインストールされます。DPM クライアントをインストールするスクリプトは最後に実行されるように設定してください。

```
#Add ESX firewall open
esxcfg-firewall -o 68,udp,out,dpmbootreq
esxcfg-firewall -o 68,udp,in,dpmbootack

esxcfg-firewall -o 26504,tcp,out,dpmagnttcp
esxcfg-firewall -o 26509,tcp,in,dpmshutdwn
esxcfg-firewall -o 26529,udp,in,dpmrupdup
esxcfg-firewall -o 26510,tcp,in,dpmrupdtcp

# Reserve DPM agent installation after rebooting.
cat > /etc/rc.d/rc3.d/S99_z_DPM_Agent_Install_Config.sh << DPM_AGENT_SETUP

# Set server IPs
NFSSERVER=192.168.1.3
DPMSERVER=192.168.1.3

# Open ports to mount NFS sharepoint
esxcfg-firewall -e nfsClient

# Mount and copy DPM agent
mkdir -p /tmp/dpmclient-installer
/bin/mount -o nolock,ro -t nfs ¥NFSSERVER:/exports /tmp/dpmclient-installer
cp -r /tmp/dpmclient-installer/daemon/redhatall/ia32 /tmp/dpmagent

# Install DPM agent
echo "/etc/SuSE-release" > /tmp/dpmagent/suse-linux.txt
touch /tmp/dpmagent/depuninst.sh
chmod +x /tmp/dpmagent/*
cd /tmp/dpmagent
sed -e 's/chkconfig.*$/chkconfig: 35 40 89/' depagt > depagt.modified
mv -f depagt.modified depagt
echo "¥DPMSERVER" | ./depinst.sh
```

```
# Clean up
/bin/umount /tmp/dpmclient-installer
rm -rf /tmp/dpmclient-installer /tmp/dpmagent
esxcfg-firewall -d nfsClient

mv -f /etc/rc.d/rc3.d/S99_z_DPM_Agent_Install_Config.sh ¥
/tmp/S99_z_DPM_Agent_Install_Config-DONE.sh
DPM_AGENT_SETUP

/bin/chmod a+x /etc/rc.d/rc3.d/S99_z_DPM_Agent_Install_Config.sh
```

2. snmpd が使用するポートへのアクセス許可設定の追記

ESMPRO/ServerManager から ESMPRO/ServerAgent がインストールされた装置を監視する場合、snmpd が使用する以下のポートアクセスを許可する必要があります。そのため、以下のスクリプトをキックスタート構成ファイルの%post に追加してください。

ポート	Type	IN / OUT	名前
161	UDP	IN	esmsnmpin
		OUT	esmsnmpout
162	UDP	OUT	esmsnmptrap

```
#Add snmpd firewall open
esxcfg-firewall -o 161,udp,in,esmsnmpin
esxcfg-firewall -o 161,udp,out,esmsnmpout
esxcfg-firewall -o 162,udp,out,esmsnmptrap
```

3. 作成した ESX のキックスタート構成ファイルを NFS サーバ上へコピー

DPM が使用する NFS サーバ上の公開ディレクトリ (DPM イメージ格納用フォルダ ¥exports¥ks) に、作成した ESX のキックスタート構成ファイルをコピーします。

コピーしたファイルのパス、およびファイル名は、次項「5.1.4 ESX のブートパラメータファイル作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

5.1.4. ESX のブートパラメータファイル作成

1. ESX のブートパラメータファイル作成

vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを使用して、以下の内容のファイルを作成します。

注: ファイルの保存時には、改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

- VMware ESX のブートパラメータファイル

```
#LinuxIParm Config File
#LinuxOs VMware ESX 4
default esx-ks
prompt 0
timeout 50
label esx-ks
kernel esx/vmlinuz
append initrd=esx/nitrd.img mem=512M ks=nfs:192.168.1.81:/exports/ks/esxks.cfg
```

- (1) 「5.1.1 DPMのセットアップ」の手順2「ESXインストールCDをイメージビルダーで登録」で「オペレーティングシステム名」に入力した値を指定します。
- (2) 「5.1.3 ESXのキックスター構成ファイルの編集」の手順5「作成したESXのキックスター構成ファイルをNFSサーバ上へコピー」で記録しておいたNFSサーバのパスを記載します。
以下の書式で記載してください。
nfs : NFSサーバのIPアドレス:キックスターファイルのパス

2. 作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー

注: ファイル名は拡張子無しで保存します。

編集したブートパラメータファイルを「DPM イメージ格納用フォルダ¥AnsFile¥linux¥」フォルダに保存します。

注: このフォルダに保存したファイルが、次項「5.1.5 DPM に OS インストールシナリオ登録」の手順で表示される [ファイル名を指定] のプルダウンボックスに表示されます。

5.1.5. DPM に OS インストールシナリオ登録

ESX のキックスター構成ファイルを、Linux の OS インストールシナリオとして DPM に登録してください。

1. DPMのWebコンソール上で、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。ツリービュー上で、[リソース] アイコン - [シナリオ] アイコン - [シナリオ追加するシナリオグループ] アイコンをクリックします。
2. [シナリオ] アイコンに対する [設定] メニューが表示されますので、[シナリオ追加] をクリックします。メインウィンドウに「シナリオ追加」が表示されますので、[OS] タブを選択します。
3. [OS名] プルダウンボックスから [Linux] を選択します。
4. [セットアップパラメータファイル] グループボックスの [ファイル名を指定] をオンにし、プルダウンボックスから、「5.1.4 ESX のブートパラメータファイル作成」の手順 2「作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー」で保存したファイル名を選択します。

シナリオ追加

グループ名: OS

シナリオ名: ESX

HW設定 | **OS** | パッケージ | バックアップ/リストア | オプション

OS

OS名: Linux

OS種別: Linux

セットアップパラメータファイル

マシン名で割り当てる

ファイル名を指定: esx

OK キャンセル

5. シナリオ実行動作設定に「シナリオ開始時に対象マシンの OS を再起動する」を設定してください。

シナリオ追加

グループ名: OS

シナリオ名: ESX

HW設定 | OS | パッケージ | バックアップ/リストア | **オプション**

シナリオ実行動作設定

シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する

シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする

⚠️ ディスク複製OSインストールを目的としてリストアを行う場合は、本項目を指定しないでください。

OK キャンセル

以上で DPM の OS インストールシナリオ登録は完了です。

6. ESXi 4.1 自動インストール (スクリプトインストール) 用シナリオ作成

ESXi の自動インストールを行うには、DPM に ESXi のクリアインストールシナリオを登録後、SigmaSystemCenter に登録し、自動インストールを行うグループに対して、配布ソフトウェアとして追加してください。

概略手順

1. DPM のセットアップ
2. ESXi 4.1 のキックスタート構成ファイル作成
3. ESXi 4.1 のブートパラメータファイル作成
4. DPM に OS インストールシナリオ登録

注: 本ソリューションガイドに記載しているキックスタート構成ファイルのスクリプトは、サンプルとしての提供です。ご使用の環境に合わせたカスタマイズ、および動作検証を十分に行った上で引用してください。

また、概略手順の 1.~3.まではファイルの配置を手動で行うものがあります。手順実施後は以下のフォルダ構成になっているかを確認してください。

<TFTP ルートフォルダ>

- + pxelinux
 - + esxi (任意の名前)
 - mboot.c32
 - menu.c32
 - vmkboot.gz
 - vmkernel.gz
 - sys.vgz
 - cim.vgz
 - ienviron.vgz
 - install.vgz

<DPM イメージ格納用フォルダ>

- + exports
 - + esxi (任意の名前)
 - ESXi4.1 のインストール CD の内容
 - + ks
 - esxi.cfg (任意の名前)
 - + AnsFile
 - + linux
 - esxi (任意の名前)
-

6.1.1. DPM のセットアップ

DPM のセットアップを行います。また、ESXi 自動インストールを行う場合、NFS サーバの構築が必要となります。

注: NFS サーバと DPM 管理サーバは同じマシンにインストールしてください。

NFS サーバの構築については、「DeploymentManager インストレーションガイド」の「付録 C NFS サーバを構築する」を参照してください。

DPM の NFS 共有フォルダは、「DPM イメージ格納用フォルダ¥exports」になります。DPM イメージ格納用フォルダは DPM の Web コンソールから確認できます。既定値は「C:¥Deploy」になります。

1. PXE ブート用ファイルの準備

PXE ブートするために「TFTP ルートフォルダ¥pxelinux¥」(TFTP ルートフォルダの既定値は、「DPM のインストールフォルダ¥PXE¥Images」になります。) に任意の名前のフォルダを作成し、VMware ESXi のインストール CD から以下のファイルをコピーします。作成したフォルダ名は、「6.1.3 ESXi 4.1 のブートパラメータファイル作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

- mboot.c32
- menu.c32
- vmkboot.gz
- vmkernel.gz
- sys.vgz
- cim.vgz
- ienviron.vgz
- install.vgz

2. インストール用ファイルの準備

VMware ESXi のインストールのために「DPM イメージ格納用フォルダ¥exports¥」に任意の名前のフォルダを作成し、VMware ESXi のインストール CD の内容をコピーします。

作成したフォルダ名は、次項「6.1.2 ESXi 4.1 のキックスタート構成ファイルの作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

6.1.2. ESXi 4.1 のキックスタート構成ファイルの作成

デフォルトのキックスタート構成ファイルについては VMware 社が発行する「ESXiInstallable および vCenter Server セットアップガイド」を参照して作成します。

関連情報: 詳細については、VMware 社が発行の「ESXiInstallable および vCenter Server セットアップガイド」の「スクリプトモードを使用した ESXi のインストール」を参照してください。

1. キックスタート構成ファイルの作成

注: ファイルの保存時には改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

下記の内容のファイルを作成します。

```
# Accept the VMware End User License Agreement
vmaccepteula

# Set the root password for the DCUI and Tech Support Mode
rootpw --iscrypted mypassword

# Choose the first discovered disk to install onto
autopart --firstdisk --overwritevmfs

# The installation media is in the CD-ROM drive
install url nfs://192.168.1.3/exports/esxi/

# Set the network to DHCP on the first network adapter
network --bootproto=static --ip=192.168.1.1 --hostname=localhost.localdomain
--netmask=255.255.255.0 --gateway=192.168.1.1 --nameserver=192.168.1.1
--device=vmnic0 --addvmportgroup=false

# License
vmserialnum --esx=*****_*****_*****_*****_*****

# Reboot after installation
reboot
```

- vmaccepteula
ESXi の使用許諾契約書に同意します。
- rootpw
root アカウントのパスワードを設定します。--iscrypted を指定して、暗号化したパスワードを指定します。
指定したパスワードはスクリプトインストール時に置換されます。
- autopart
ESXi をインストールするディスクを指定します。

- install
インストールメディアに「6.1.1 DPM のセットアップ」の手順 2「インストール用ファイルの準備」で作成した NFS サーバのフォルダを指定します。
- network
ネットワークの設定をします。
静的 IP アドレス、ホスト名、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、DNS サーバを指定します。
指定した値はスクリプトインストール時に置換されます。
- vmserialnum
ライセンスキーを指定します。指定しない場合は評価モードでインストールされます。
- reboot
スクリプトインストール後に再起動をします。

2. 作成した ESXi のキックスタート構成ファイルを NFS サーバ上へコピー

DPM が使用する NFS サーバ上の公開ディレクトリ (DPM イメージ格納用フォルダ `¥exports¥ks`) に、作成した ESXi のキックスタート構成ファイルをコピーします。
コピーしたファイルのパス、およびファイル名は、次項「6.1.3 ESXi 4.1 のブートパラメータファイル作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

6.1.3. ESXi 4.1 のブートパラメータファイル作成

1. ESXi のブートパラメータファイル作成

vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを使用して、以下の内容のファイルを作成します。

注: ファイルの保存時には、改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

```

default esxi-ks
prompt 0
timeout 50
label esxi-ks
  kernel /esxi/mboot.c32
  append /esxi/vmkernel.gz ks=nfs://192.168.1.3/exports/ks/esxi.cfg quiet ---
/esxi/vmkernel.gz --- /esxi/sys.vgz --- /esxi/cim.vgz --- /esxi/ienvirom.vgz --- /esxi/install.vgz

```

-
- (1) 「6.1.1 DPMのセットアップ」の手順1「PXEブート用ファイルの準備」で作成したフォルダ名を指定します。
 - (2) 「6.1.2 ESXi 4.1のキックスタート構成ファイルの作成」の手順2「作成したESXiのキックスタート構成ファイルをNFSサーバ上へコピー」で記録しておいたNFSサーバのパスを記載します。
以下の書式で記載してください。
nfs ://NFSサーバのIPアドレス/キックスタートファイルのパス

2. 作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー

注: ファイル名は拡張子無しで保存します。

編集したブートパラメータファイルを「DPM イメージ格納用フォルダ¥AnsFile¥linux¥」フォルダに保存します。

注: このフォルダに保存したファイルが、次項「6.1.4 DPM に OS インストールシナリオ登録」の手順で表示される [ファイル名を指定] のプルダウンボックスに表示されます。

6.1.4. DPM に OS インストールシナリオ登録

ESXi のキックスタート構成ファイルを、Linux の OS インストールシナリオとして DPM に登録してください。

1. DPM の Web コンソール上で、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。ツリービュー上で、[リソース] - [シナリオ] - [シナリオ追加するシナリオグループ] をクリックします。
2. [シナリオ] に対する [設定] メニューが表示されますので、[シナリオ追加] をクリックします。メインウィンドウに「シナリオ追加」が表示されますので、[OS] タブを選択します。
3. [OS 名] プルダウンボックスから [Linux] を選択します。

4. [セットアップパラメータファイル] グループボックスの [ファイル名を指定] をオンにし、プルダウンボックスから、「6.1.3 ESXi 4.1 のブートパラメータファイル作成」の手順2「作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー」で保存したファイル名を選択します。

The screenshot shows the 'シナリオ追加' (Add Scenario) dialog box with the 'OS' tab selected. The 'グループ名' (Group Name) is 'OS' and the 'シナリオ名' (Scenario Name) is 'ESXi'. Under the 'OS' section, 'OS名' (OS Name) is 'Linux' and 'OS種別' (OS Type) is 'Linux'. In the 'セットアップパラメータファイル' (Setup Parameter File) section, the radio button 'ファイル名を指定' (Specify file name) is selected, and the dropdown menu shows 'esxi'. The 'OK' and 'キャンセル' (Cancel) buttons are at the bottom right.

5. シナリオ実行動作設定に [シナリオ終了時に対象マシンの電源を OFF にする] を設定してください。

The screenshot shows the 'シナリオ追加' (Add Scenario) dialog box with the 'オプション' (Option) tab selected. The 'グループ名' (Group Name) is 'OS' and the 'シナリオ名' (Scenario Name) is 'ESXi'. Under the 'シナリオ実行動作設定' (Scenario Execution Action Setting) section, the checkbox 'シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする' (Turn off the power of the target machine when the scenario ends) is checked. A warning message below it reads: 'ディスク複製OSインストールを目的としてリストアを行う場合は、本項目を指定しないでください。' (When restoring for the purpose of disk cloning OS installation, do not specify this item). The 'OK' and 'キャンセル' (Cancel) buttons are at the bottom right.

以上で DPM の OS インストールシナリオ登録は完了です。

7. ESXi 5 自動インストール (スクリプトインストール)用シナリオ作成

ESXi 5 の自動インストールを行うには、DPM に ESXi 5 のクリアインストールシナリオを登録後、SigmaSystemCenter に登録し、自動インストールを行うグループに対して、配布ソフトウェアとして追加してください。

概略手順:

1. DPM のセットアップ
2. ESXi 5 のキックスタート構成ファイル作成
3. ESXi 5 のブートパラメータファイル作成
4. ESXi 5 の boot.cfg 配置ファイル作成
5. DPM に OS インストールシナリオ登録

注: 本ソリューションガイドに記載しているキックスタート構成ファイルのスクリプトは、サンプルとしての提供です。ご使用の環境に合わせたカスタマイズ、および動作検証を十分に行った上で引用してください。

また、概略手順の 1.~4.まではファイルの配置を手動で行うものがあります。手順実施後は以下のフォルダ構成になっているかを確認してください。

<TFTP ルートフォルダ>

- + gpxelinux
 - + ESXi5_PXEBOOT (任意の名前)
 - mboot.c32
 - menu.c32
 - boot.cfg

<DPM イメージ格納用フォルダ>

- + exports
 - + ESXi5 (任意の名前)
 - ESXi 5 のインストール CD の内容
 - + ks
 - esxi5.cfg (任意の名前)
 - + AnsFile
 - + linux
 - esxi5_boot (任意の名前)
-

7.1.1. DPM のセットアップ

DPM のセットアップを行います。

ESXi 自動インストールを行う場合、IIS サーバに Web 共有フォルダの設定が必要となります。手順は「8 IIS 構築」を参照してください。

注: IIS で公開するフォルダは、「DPM イメージ格納用フォルダ¥exports」になります。DPM イメージ格納用フォルダは DPM の Web コンソールから確認できます。既定値は、「C:¥Deploy」になります。

また、クラスタ構成など DPM の詳細設定で DHCP サーバを別居設定にしている場合は、DHCP サーバに対してオプション設定が必要となります。手順は「7.1.6 DHCP サーバ / DPM サーバ別居の場合の設定」を参照してください。

1. PXE ブート用ファイルの準備

PXE ブートするために「TFTP ルートフォルダ¥gpxelinux¥」(TFTP ルートフォルダの既定値は、「DPM のインストールフォルダ¥PXE¥images」になります。) に任意の名前のフォルダ (本書では以降、「ESXi5_PXEBOOT」として進めます。) を作成し、そのフォルダ配下に VMware ESXi 5 のインストール CD から以下のファイルをコピーします。

作成したフォルダ名は、「7.1.3 ESXi 5 のブートパラメータファイル作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

- mboot.c32
- menu.c32

注: DeploymentManager と NetvisorPro が同一マシンにインストールされている場合、TFTP サービスが競合し、互いの TFTP サービスが正常に動作しない場合があります。そのような環境での設定については、「WebSAM DeploymentManager Ver6.3 インストールガイド」の「付録 F DPM サーバと NetvisorPro V を同一マシン上に構築する」を参照してください。

また、NetvisorPro の TFTP サービスを使用する場合、ファイルのコピー先は NetvisorPro の TFTP ルートフォルダを使用して、DeploymentManager からアクセスできるように設定してください。

2. インストール用ファイルの準備

VMware ESXi 5 のインストールのために「DPM イメージ格納用フォルダ¥exports¥」に任意の名前のフォルダ (本書では以降、「ESXi5」として進めます。) を作成し、そのフォルダ配下に VMware ESXi 5 のインストール CD の内容をコピーします。

作成したフォルダ名は、次項「7.1.2 ESXi 5 のキックスタート構成ファイルの作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

7.1.2. ESXi 5 のキックスタート構成ファイルの作成

デフォルトのキックスタート構成ファイルについては、VMware 社が発行する「vSphere のインストールとセットアップガイド」を参照して作成します。

関連情報: 詳細については、VMware 社が発行の「vSphere のインストールとセットアップガイド」の「スクリプトを使用した、ホストのインストール、アップグレード、または移行」を参照してください。

1. キックスタート構成ファイルの作成

注:

- ・ファイルの保存時には改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

- ・ DeploymentManager からシナリオを実行する場合は、作成したキックスタート構成ファイルの内容は変更されません。

- ・ SigmaSystemCenter からシナリオを実行する場合は、rootpw / network コマンドに指定した値が置換されます。

下記の内容のファイルを作成します。

各コマンドは改行せず、1 行で記載してください。

```
# Accept the VMware End User License Agreement
vmaccepteula

# Set the root password for the DCUI and Tech Support Mode
rootpw --iscrypted mypassword

# Choose the first discovered disk to install onto
install --firstdisk --overwritevmfs

# Set the network to DHCP on the first network adapter
network --bootproto=static --ip=192.168.1.1 --hostname=localhost.localdomain
--netmask=255.255.255.0 --gateway=192.168.1.1 --nameserver=192.168.1.1
--device=vmnic0 --addvmportgroup=false

# Reboot after installation
reboot --noeject
```

- ・ vmaccepteula
ESXi の使用許諾契約書に同意します。

- rootpw
root アカウントのパスワードを設定します。--iscrypted を指定して、暗号化したパスワードを指定します。
SigmaSystemCenter からシナリオを実行する場合は、指定したパスワードはスクリプトインストール時に置換されます。
- install
ESXi をインストールするディスクを指定するコマンドです。
- network
ネットワークの設定をします。
静的 IP アドレス、ホスト名、サブネットマスク、デフォルトゲートウェイ、DNS サーバを指定します。
SigmaSystemCenter からシナリオを実行する場合は、指定した値はスクリプトインストール時に置換されます。
- reboot
スクリプトインストール後に再起動をします。

2. 作成した ESXi のキックスタート構成ファイルを IIS サーバ上へコピー

DPM が使用する IIS サーバ上の配置ディレクトリ (DPM イメージ格納用フォルダ %exports%ks) に、作成した ESXi のキックスタート構成ファイル (本書では以降、「esxi5.cfg」として進めます。) をコピーします。

コピーしたファイルのパス、およびファイル名は、「7.1.4 ESXi 5 の boot.cfg 配置ファイル作成」の手順で必要となるため、記録しておいてください。

7.1.3. ESXi 5 のブートパラメータファイル作成

1. ESXi 5 のブートパラメータファイル作成

vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを使用して、以下の内容のファイルを作成します。

注: ファイルの保存時には、改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

```

DEFAULT /gpxelinux/ESXi5_PXEBOOT/menu.c32
MENU TITLE ESXi-5.0.0-381646-standard Boot Menu
NOHALT 1
PROMPT 0

```

```
TIMEOUT 10
LABEL install
  KERNEL /gpxelinux/ESXi5_PXEBOOT/mboot.c32
  APPEND -c /gpxelinux/ESXi5_PXEBOOT/boot.cfg
  MENU LABEL ESXi-5.0.0-381646-standard ^Installer
```

- (1) 「7.1.1 DPMのセットアップ」の手順1「PXEブート用ファイルの準備」で作成したフォルダ名を指定します。
- (2) インストーラで表示される文字列を指定します。ESXのバージョンやビルド番号などの表示を指定できますが、スクリプトインストールには使用しません。

2. 作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー

注: ファイル名は拡張子無しで保存します。

編集したブートパラメータファイルを「DPM イメージ格納用フォルダ¥AnsFile¥linux¥」フォルダに保存します。(本書では以降、上記ファイルを「esxi5_boot」として進めます。)

注: このフォルダに保存したファイルが、「7.1.5 DPMに OS インストールシナリオ登録」の手順で表示される [ファイル名を指定] のプルダウンボックスに表示されます。

7.1.4. ESXi 5 の boot.cfg 配置ファイル作成

1. boot.cfg 配置ファイルの作成

viなどのテキストエディタか、改行コードをLinux改行コード(LF)として保存できるエディタを使用して、以下の内容のファイルを作成します。

ESXのインストールCDに格納されているboot.cfgファイルをコピーし、下記の内容を編集します。boot.cfgにはインストールに必要なモジュールが記載されており、バージョンごとに異なるため、必ずプロビジョニングを行うインストールCDに格納されているboot.cfgを使用してください。

- prefix オプションが存在しない場合は追記、存在する場合は変更して、ESXのインストールするバイナリを公開しているURLを指定します
- kernelopt オプションが存在しない場合は追記、存在する場合は変更して、キックスタート構成ファイルを指定します。
- 記載済みのモジュールの指定をモジュール名のみに変更します。
"/" を削除します。

削除の例)

1. kernel=/tboot.b00

↓

kernel=tboot.b00

2. modules=/b.b00 --- /useropts.gz --- /k.b00 --- (以下、略)

↓

modules=b.b00 --- useropts.gz --- k.b00 --- (以下、略)

注: ファイルの保存時には、改行コードがLinux改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

- VMware 社の ESX インストール CD から作成した boot.cfg

このサンプルは ESXi5.5 を基に作成した boot.cfg になります。ESXi5.5 以外では使用できません。

```
bootstate=0
title>Loading ESXi installer
prefix=http://192.168.0.1/exports/ESXi5
kernel=tboot.b00
kernelopt=ks=http://192.168.0.1/exports/ks/esxi5.cfg
modules=b.b00 --- jumpstr.gz --- useropts.gz --- k.b00 --- chardevs.b00 --- a.b00 --- user.b00
--- sb.v00 --- s.v00 --- ata_pata.v00 --- ata_pata.v01 --- ata_pata.v02 --- ata_pata.v03 ---
ata_pata.v04 --- ata_pata.v05 --- ata_pata.v06 --- ata_pata.v07 --- block_cc.v00 ---
ehci_ehc.v00 --- elxnet.v00 --- weaselin.t00 --- esx_dvfi.v00 --- xlibs.v00 --- ima_qla4.v00 ---
ipmi_ipm.v00 --- ipmi_ipm.v01 --- ipmi_ipm.v02 --- lpfc.v00 --- lsi_mr3.v00 --- lsi_msgp.v00 ---
misc_cni.v00 --- misc_dri.v00 --- mtip32xx.v00 --- net_be2n.v00 --- net_bnx2.v00 ---
net_bnx2.v01 --- net_cnic.v00 --- net_e100.v00 --- net_e100.v01 --- net_enic.v00 ---
net_forc.v00 --- net_igb.v00 --- net_ixgb.v00 --- net_mlx4.v00 --- net_mlx4.v01 ---
net_nx_n.v00 --- net_tg3.v00 --- net_vmxn.v00 --- ohci_usb.v00 --- qlnative.v00 --- rste.v00 ---
sata_ahc.v00 --- sata_ata.v00 --- sata_sat.v00 --- sata_sat.v01 --- sata_sat.v02 ---
sata_sat.v03 --- sata_sat.v04 --- scsi_aac.v00 --- scsi_adp.v00 --- scsi_aic.v00 ---
scsi_bnx.v00 --- scsi_bnx.v01 --- scsi_fni.v00 --- scsi_hps.v00 --- scsi_ips.v00 --- scsi_lpf.v00
--- scsi_meg.v00 --- scsi_meg.v01 --- scsi_meg.v02 --- scsi_mpt.v00 --- scsi_mpt.v01 ---
scsi_mpt.v02 --- scsi_qla.v00 --- scsi_qla.v01 --- uhci_usb.v00 --- tools.t00 --- xorg.v00 ---
imgdb.tgz --- imgpayld.tgz
```

- (1) IISサーバのIPアドレスを指定します。
- (2) 「7.1.1 DPMのセットアップ」の手順2「インストール用ファイルの準備」で作成したフォルダ名を指定します。
- (3) 「7.1.2 ESXi 5のキックスタート構成ファイルの作成」で作成したキックスタート構成ファイルのファイル名を指定します。

- NEC Custom Image の ESX インストール CD から作成した boot.cfg

```
bootstate=0
title>Loading ESXi installer
prefix=http://192.168.0.1/exports/ESXi5
kernel=tboot.b00
kernelopt=ks=http://192.168.0.1/exports/ks/esxi5.cfg
modules=b.b00 --- jumpstr.gz --- useropts.gz --- k.b00 --- chardevs.b00 --- a.b00 --- user.b00
--- sb.v00 --- s.v00 --- misc_cni.v00 --- net_bnx2.v00 --- net_bnx2.v01 --- net_cnic.v00 ---
net_tg3.v00 --- scsi_bnx.v00 --- scsi_bnx.v01 --- ata_pata.v00 --- ata_pata.v01 ---
ata_pata.v02 --- ata_pata.v03 --- ata_pata.v04 --- ata_pata.v05 --- ata_pata.v06 ---
ata_pata.v07 --- block_cc.v00 --- ehci_ehc.v00 --- elxnet.v00 --- weaselin.t00 --- esx_dvfi.v00
--- xlibs.v00 --- ima_qla4.v00 --- ipmi_ipm.v00 --- ipmi_ipm.v01 --- ipmi_ipm.v02 --- lpfc.v00 ---
```

```
lsi_mr3.v00 --- lsi_msgp.v00 --- misc_dri.v00 --- mtip32xx.v00 --- net_be2n.v00 ---  
net_e100.v00 --- net_e100.v01 --- net_enic.v00 --- net_forc.v00 --- net_igb.v00 ---  
net_ixgb.v00 --- net_mlx4.v00 --- net_mlx4.v01 --- net_nx_n.v00 --- net_vmxn.v00 ---  
ohci_usb.v00 --- qlnative.v00 --- rste.v00 --- sata_ahc.v00 --- sata_ata.v00 --- sata_sat.v00 ---  
sata_sat.v01 --- sata_sat.v02 --- sata_sat.v03 --- sata_sat.v04 --- scsi_aac.v00 ---  
scsi_adp.v00 --- scsi_aic.v00 --- scsi_fni.v00 --- scsi_hps.v00 --- scsi_ips.v00 --- scsi_lpf.v00  
--- scsi_meg.v00 --- scsi_meg.v01 --- scsi_meg.v02 --- scsi_mpt.v00 --- scsi_mpt.v01 ---  
scsi_mpt.v02 --- scsi_qla.v00 --- scsi_qla.v01 --- uhci_usb.v00 --- tools.t00 --- nec_conf.v00 ---  
xorg.v00 --- imgdb.tgz --- imgpayld.tgz
```

- (1) IISサーバのIPアドレスを指定します。
- (2) 「7.1.1 DPMのセットアップ」の手順2「インストール用ファイルの準備」で作成したフォルダ名を指定します。
- (3) 「7.1.2 ESXi 5のキックスタート構成ファイルの作成」で作成したキックスタート構成ファイルのファイル名を指定します。

2. boot.cfg 配置ファイルを DPM の所定のフォルダへコピー

作成した boot.cfg 配置ファイルを「7.1.1 DPM のセットアップ」の手順 1「PXE ブート用ファイルの準備」で作成したフォルダ ESXi5_PXEBOOT へコピーする。

7.1.5. DPM に OS インストールシナリオ登録

ESXi のキックスタート構成ファイルを、Linux の OS インストールシナリオとして DPM に登録してください。

1. DPMのWebコンソール上で、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。ツリービュー上で、[リソース] - [シナリオ] - [シナリオ追加するシナリオグループ] をクリックします。
2. [シナリオ] に対する [設定] メニューが表示されますので、[シナリオ追加] をクリックします。メインウィンドウに「シナリオ追加」が表示されますので、[OS] タブを選択します。
3. [OS 名] プルダウンボックスから [Linux(gPXE)] を選択します。

4. [セットアップパラメータファイル] グループボックスの [ファイル名を指定] をオンにし、プルダウンボックスから、「7.1.3 ESXi 5 のブートパラメータファイル作成」の手順 2「作成したブートパラメータファイルを DPM の所定のフォルダへコピー」で保存したファイル名を選択します。

The screenshot shows the 'シナリオ追加' (Add Scenario) dialog box with the 'OS' tab selected. The 'グループ名' (Group Name) is 'ESX' and the 'シナリオ名' (Scenario Name) is 'ESXi5'. Under the 'OS' section, 'OS名' (OS Name) is 'Linux(gPXE)' and 'OS種別' (OS Type) is 'Linux'. In the 'セットアップパラメータファイル' (Setup Parameter File) section, the radio button 'ファイル名を指定' (Specify file name) is selected, and the dropdown menu shows 'esxi5_boot'. 'OK' and 'キャンセル' (Cancel) buttons are at the bottom right.

5. シナリオ実行動作設定に [シナリオ終了時に対象マシンの電源を OFF にする] チェックボックスをオンにしてください。

The screenshot shows the 'シナリオ追加' (Add Scenario) dialog box with the 'オプション' (Options) tab selected. The 'グループ名' (Group Name) is 'ESX' and the 'シナリオ名' (Scenario Name) is 'ESXi5'. Under the 'シナリオ実行動作設定' (Scenario Execution Action Settings) section, the checkbox 'シナリオ終了時に対象マシンの電源をOFFにする' (Turn off the power of the target machine at the end of the scenario) is checked. A warning message below it reads: 'ディスク複製OSインストールを目的としてリストアを行う場合は、本項目を指定しないでください。' (When restoring for the purpose of disk cloning OS installation, do not specify this item). 'OK' and 'キャンセル' (Cancel) buttons are at the bottom right.

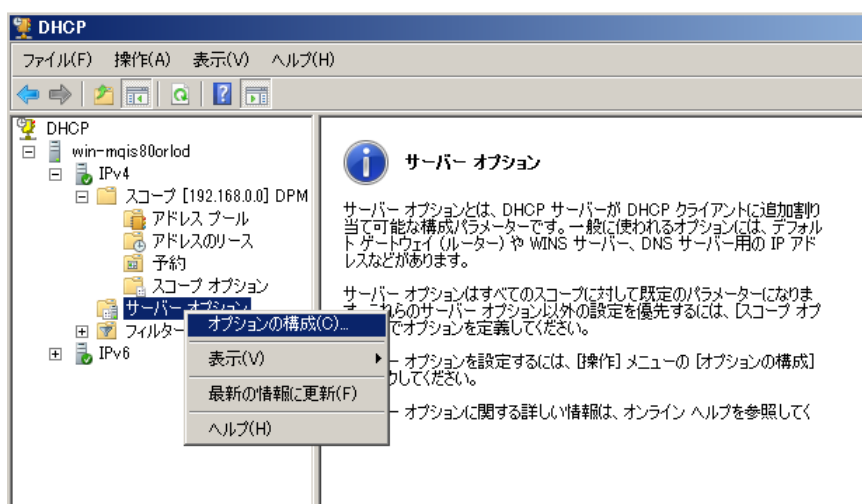
以上で DPM の OS インストールシナリオ登録は完了です。

7.1.6. DHCP サーバ / DPM サーバ別居の場合の設定

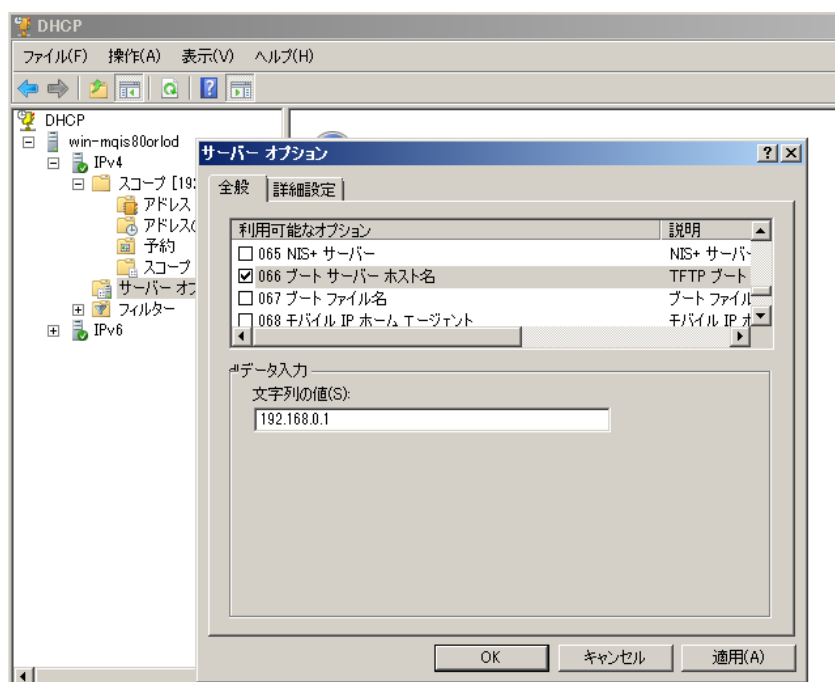
DHCP サーバを DPM サーバとは別マシンに構築している場合やクラスタ構成など DPM の詳細設定で DHCP サーバを別居設定にしている場合、DHCP サーバに対してオプション 66,67 の設定が必要です。以下の手順に従って設定してください。

(Windows Server 2008 を例に説明します)

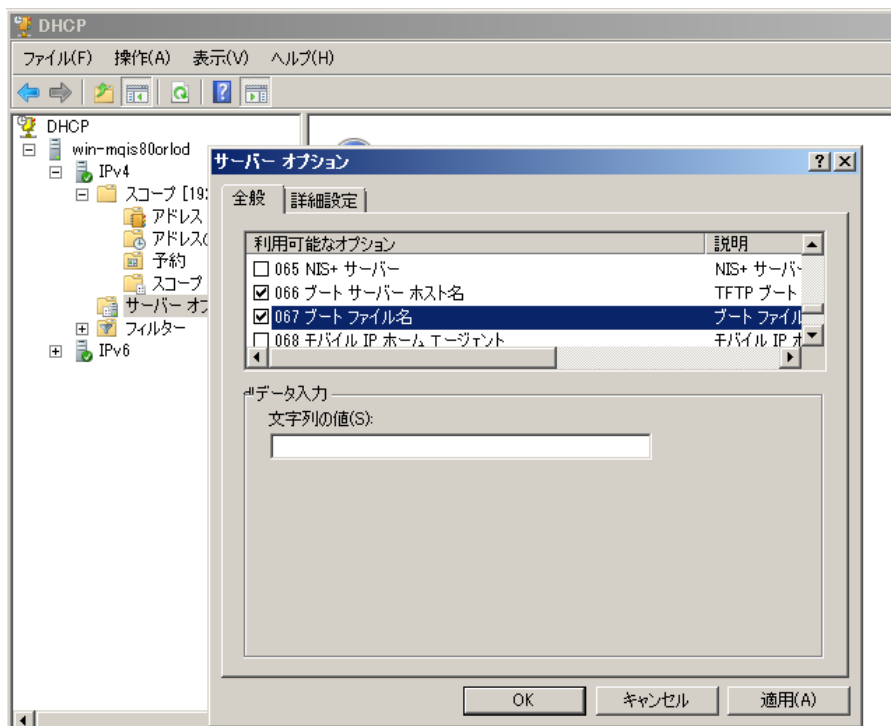
1. [スタート] メニューから [プログラム] - [管理ツール] - [DHCP] を開きます。
2. [サーバー オプション] を右クリックして、[オプションの構成(C)] を選択します。



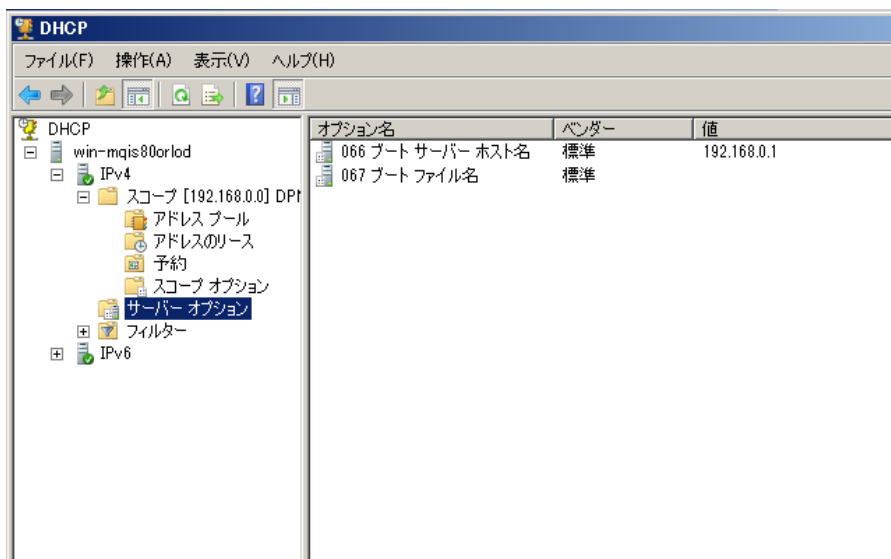
3. 「サーバー オプション」画面の [全般] タブで [066 ブート サーバー ホスト名] チェックボックスをオンにし、[文字列の値(S)] に DPM サーバの IP アドレスを入力します。



- 「サーバー オプション」画面の [全般] タブで [067 ブート ファイル名] チェックボックスをオンにします。[文字列の値(S)] の入力は不要です。



- [OK] をクリックします。



以上で DHCP サーバの設定は完了です。
サーバー オプション 66,67 は自動インストールでのみ必要な設定のため、実施後は削除しても構いません。

8. IIS 構築

ESXi 5 のスクリプトインストールを行う場合に IIS サーバが必要になります。

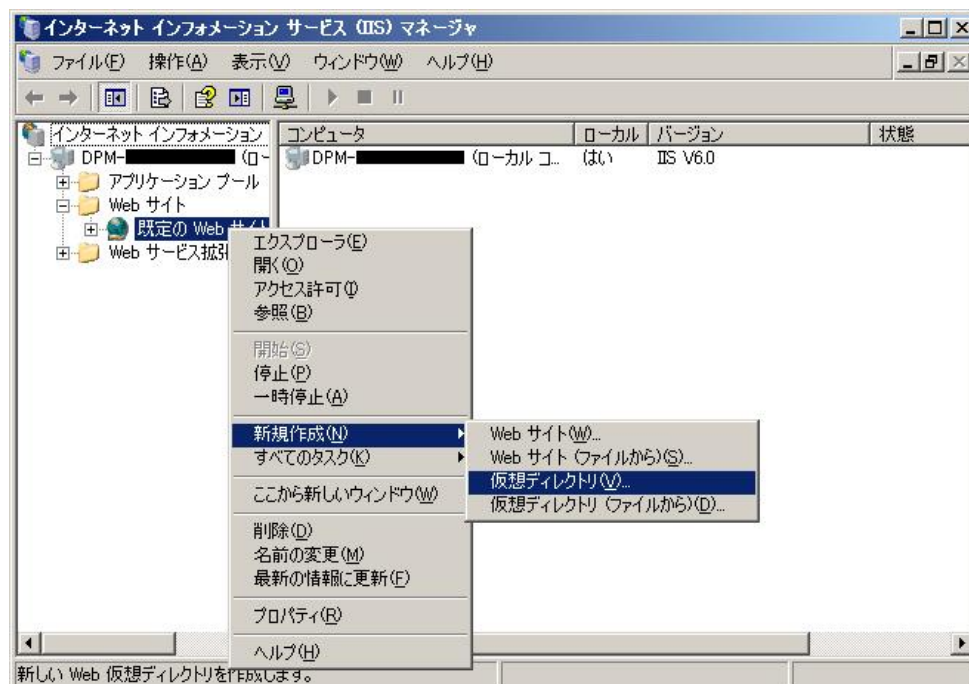
以下の手順に従って DPM サーバの NFS 共有フォルダを IIS サーバで公開するようにしてください。

8.1.1. IIS6 の場合

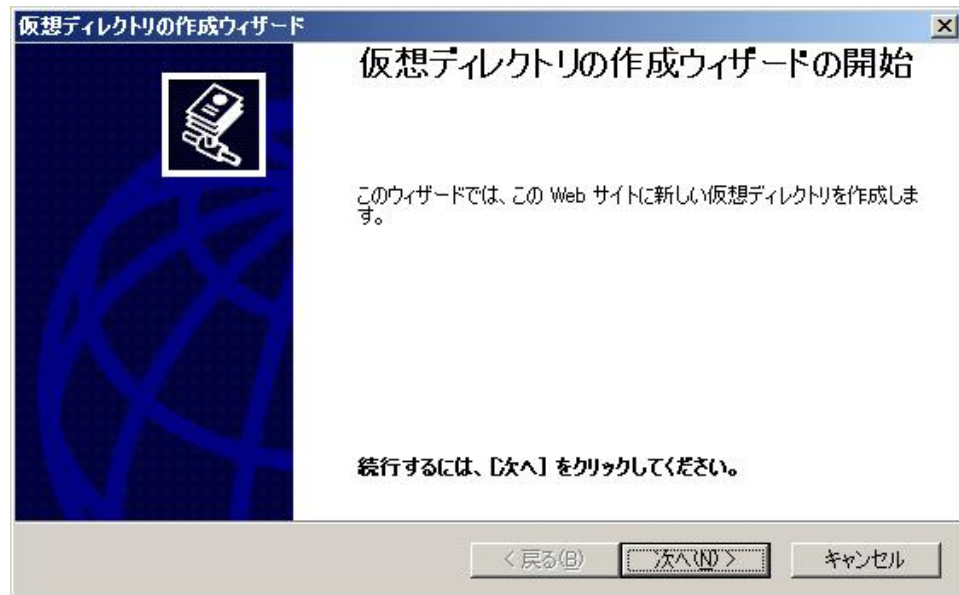
1. [スタート] メニューから [プログラム] - [管理ツール] - [インターネット インフォメーション サービス(IIS) マネージャ] を選択し、IIS を起動します。



2. 左側のツリーで[Web サイト] - [既定の Web サイト] を選択して、右クリックして、[新規作成(N)] - [仮想ディレクトリ(V)] を選択します。



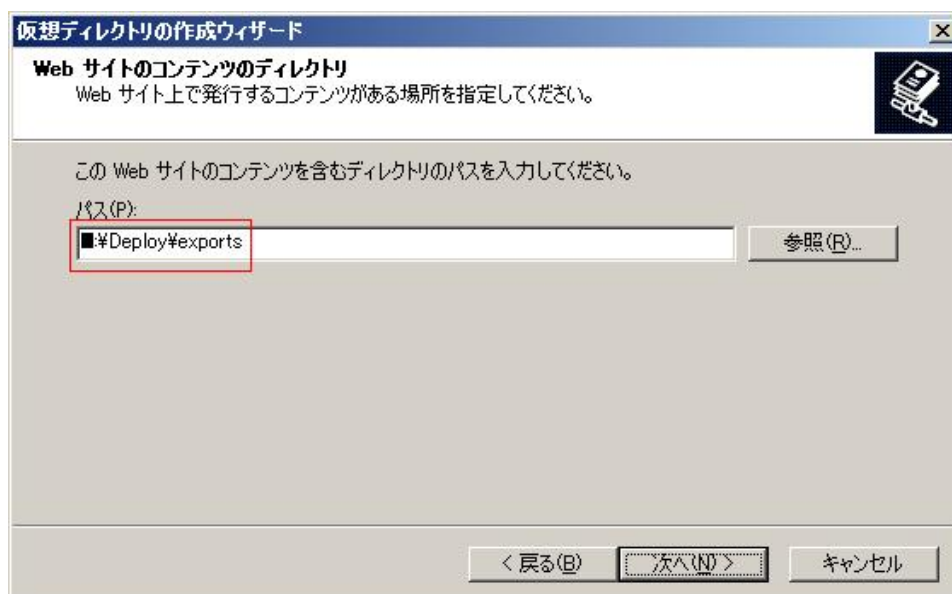
3. 「Web サイトの作成ウィザード」画面が表示されます。[次へ(N)] をクリックします。



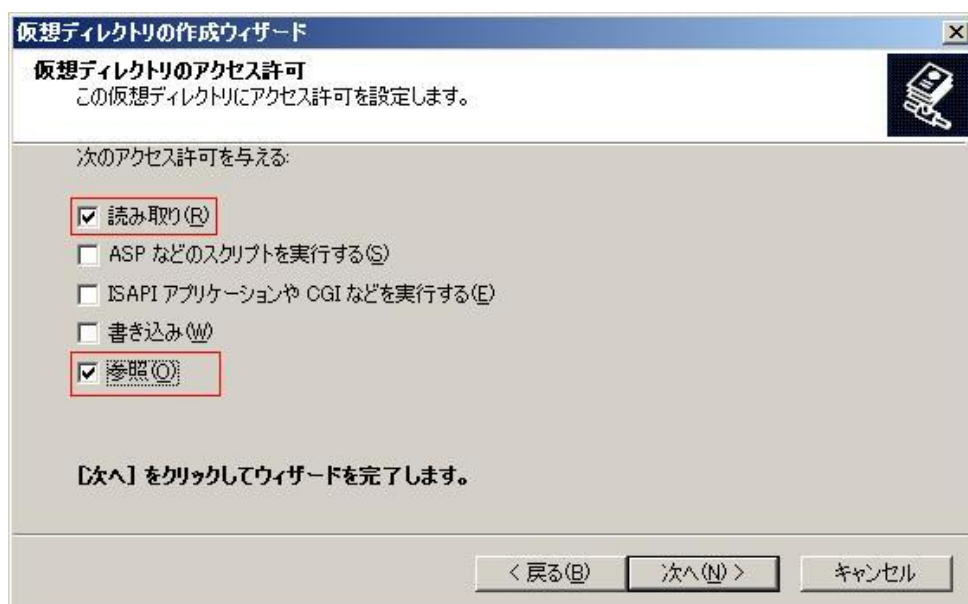
4. 「exports」を入力し、[次へ(N)] をクリックします。



5. ホームディレクトリのパスは、<DPM イメージ格納用フォルダ%exports>を指定します。
[次へ(N)] をクリックします。



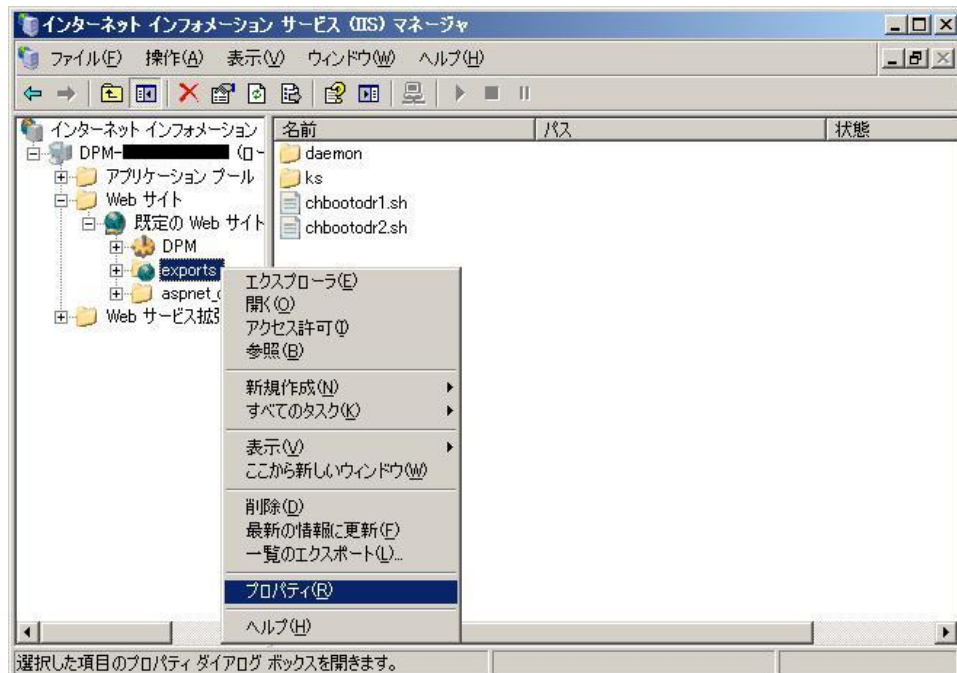
6. Web サイトのアクセス許可について、[読み取り(R)] と [参照(Q)] チェックボックスをオンにします。



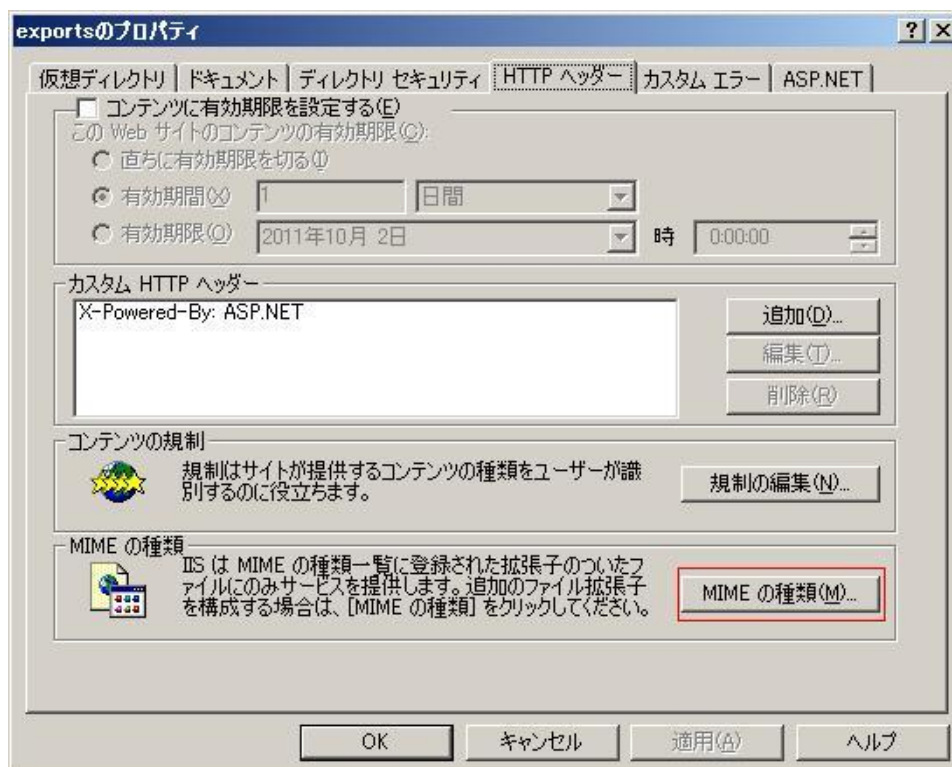
7. [完了] をクリックします。



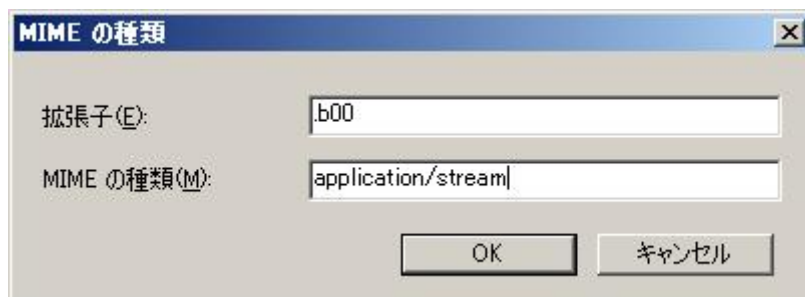
8. 作成された exports (仮想ディレクトリ) を選択して、右クリックから [プロパティ(R)] を選択します。



9. [HTTP ヘッダー] タブから、[MIME の種類(M)] を選択します。



10. 表示される画面から、「新規作成」を選択して、下記の「MIME の種類」画面を表示します。



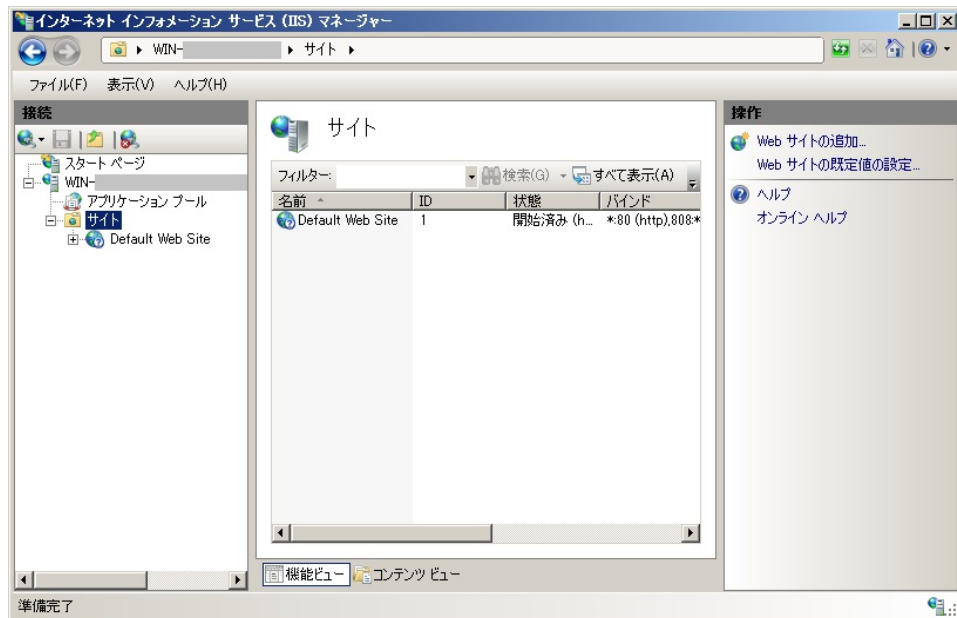
下記のそれぞれの拡張子に対して、MIME の種類に「application/stream」を設定してください。

.b00、.cfg、.gz、.i00、.t00、.tgz、.v00

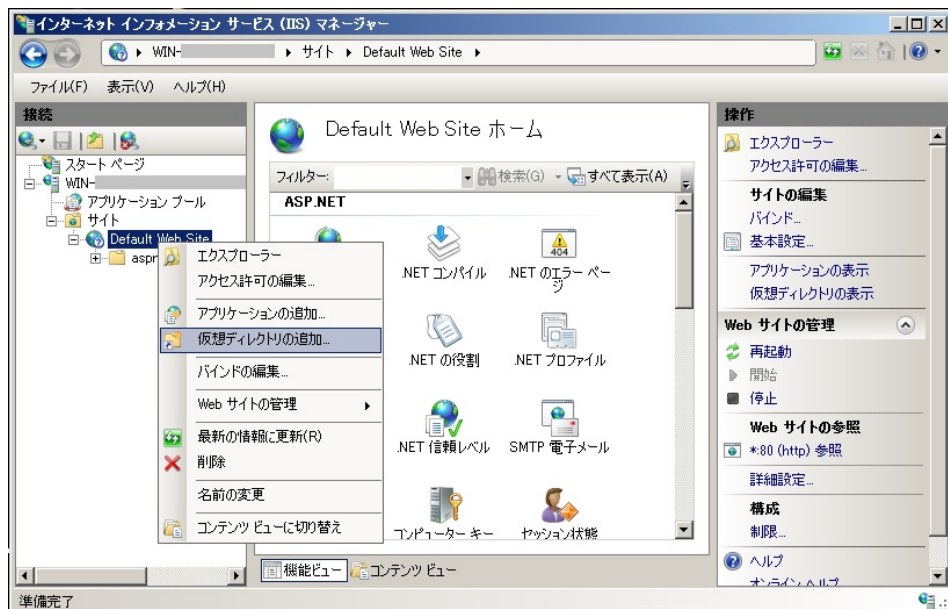
.v01、.v02、.v03、.v04、.v05、.v06、.v07

8.1.2. IIS7、IIS7.5、および IIS8 の場合

1. [スタート] メニューから [プログラム] - [管理ツール] - [インターネット インフォメーション サービス(IIS) マネージャ] を選択し、下記の画面を表示します。



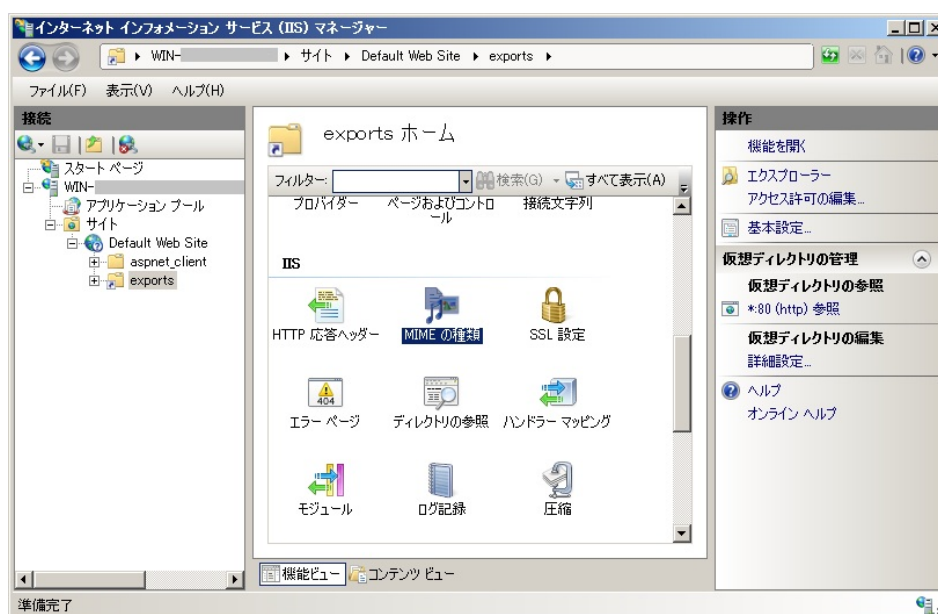
2. 左側のツリーで [サイト] - [Default Web Site] を選択して、右クリックから [仮想ディレクトリの追加] を選択します。



3. 「仮想ディレクトリの追加」ダイアログが表示されます。[エイリアス(A)] テキストボックスに「exports」を入力し、[物理パス(P)] テキストボックスに<DPM イメージ格納用フォルダ¥exports>と指定し、[OK] をクリックします。

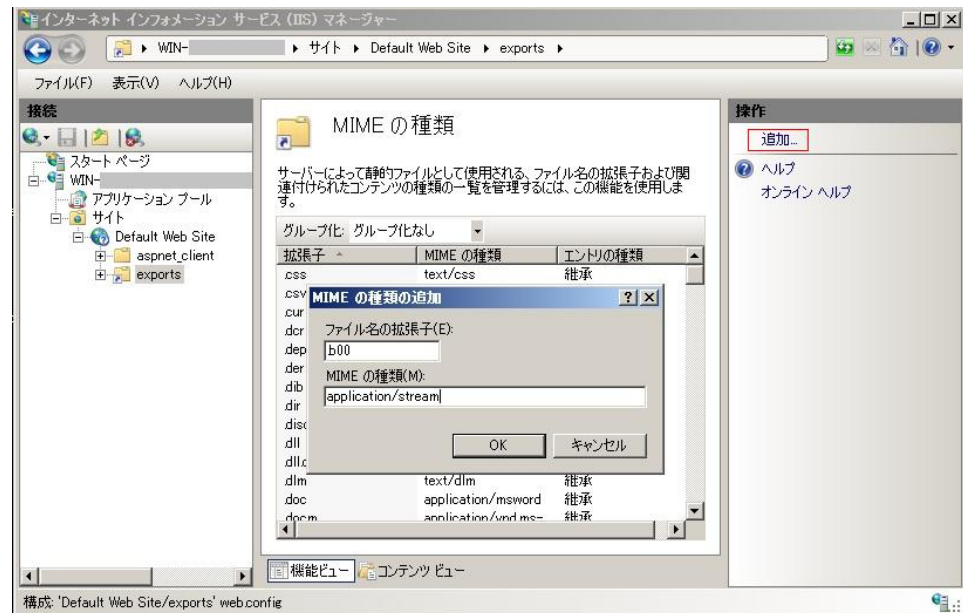


4. 「exports ホーム」画面に「MIME の種類」のアイコンを選択し、右側の画面で「機能を開く」をクリックします。



5. 右側の画面での「追加...」をクリックして、表示される「MIME の種類の追加」ダイアログから [ファイル名の拡張子(E)] と [MIME の種類(M)] テキストボックスを入力してください。

設定内容は「8.1.1 IIS6 の場合」の手順 10 を参照してください。



9. DPM を使った ESMPRO/ServerAgent 自動セットアップを行うための事前準備 (VMware ESX 用)

DPM を使用すると、管理サーバから ESMPRO/ServerAgent のリモートインストールが可能となります。また、各設定についてもシナリオとして実行することにより、リモートでの設定が可能となります。

VMware ESXi の場合は、ESMPRO/ServerAgent のインストールができないため、本準備を行う必要はありません。

ESMPRO/ServerAgent のリモートインストールを行うには、以下のパッケージを作成する必要があります。

- ◆ ESMPRO/ServerAgent インストール前の設定
 - snmpd と portmap が自動起動する設定
 - OpenIPMI の設定
 - portmap の開始
 - SNMP 環境設定ファイルの設定
 - ファイアウォールの設定
- ◆ サーバ管理ドライバのインストール
- ◆ ESMPRO/ServerAgent インストール
- ◆ ESMPRO/ServerAgent の VMware 設定
 - VMware 上で ESMPRO/ServerAgent を動作させるための設定
- ◆ ESMPRO/ServerAgent インストール後の設定
 - ラック名や通報手段 (SNMP) についての設定

これらのパッケージを作成後、SigmaSystemCenter に登録し、自動インストールを行うグループに対して、OS インストール後の配布ソフトウェアとして追加してください。

注: ESX のバージョンにより ESMPRO/ServerAgent のインストール設定に違いがあります。ESMPRO/ServerAgent for VMware、または ESMPRO/ServerAgent for VMware Infrastructure 3 に格納されている ESMPRO/ServerAgent インストレーションガイドを参照して、バージョンに合わせた設定に変更してください。

ESMPRO/ServerAgent for VMware 最新リリース媒体 [媒体番号:243-113233-001-F] の入手、または、最新リリース物件については、以下の URL を参照してください。

<https://www.support.nec.co.jp/View.aspx?NoClear=on&id=9010100272>

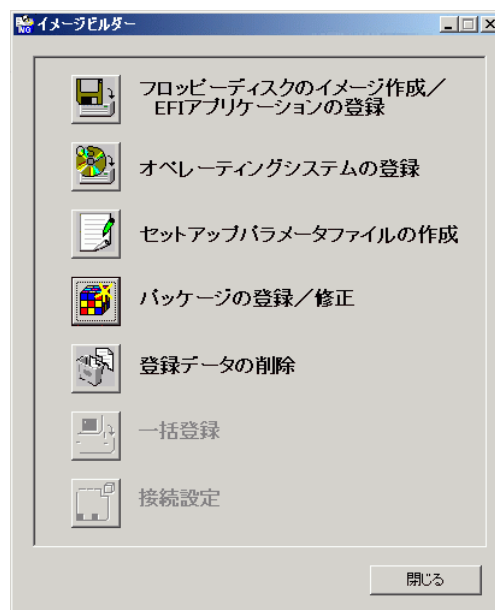
※NEC サポートポータルへログイン (ご契約様用) が必要です。

以降の手順では、CD-ROM ドライブが D ドライブを例として記載しています。

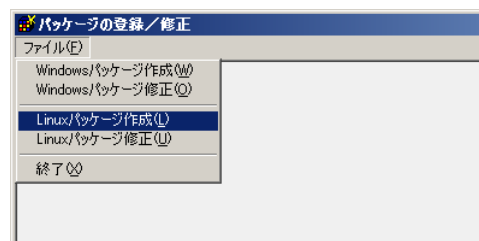
9.1.1. Linux パッケージ作成画面を開く

「Linux パッケージ作成」画面を開く手順を説明します。以降の項では、実行ファイルの作成と「Linux パッケージ作成」画面での設定により、パッケージを作成します。

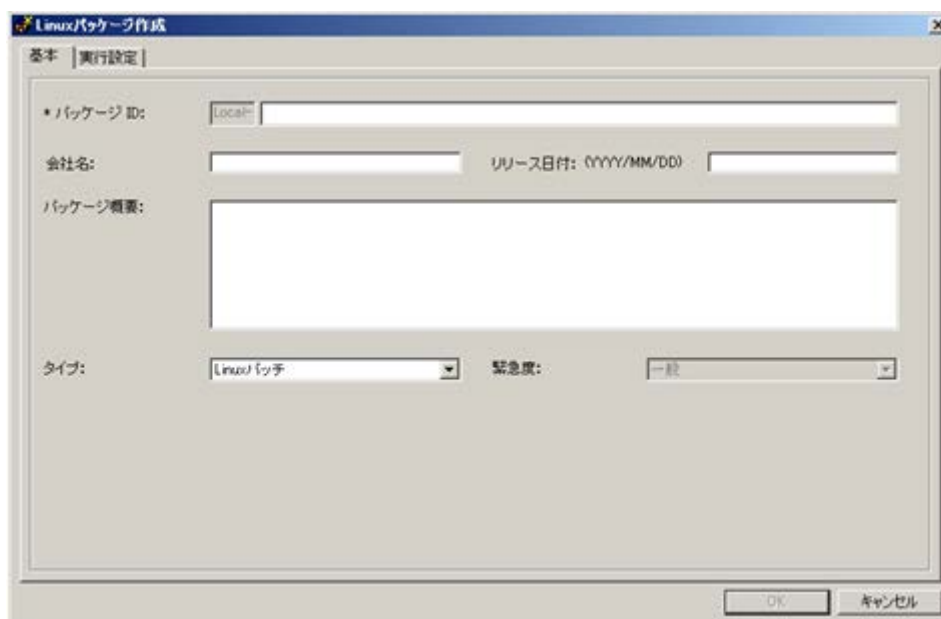
1. ESMPRO/ServerAgent for VMware、または ESMPRO/ServerAgent for VMware Infrastructure 3 の CD-ROM を管理サーバの CD-ROM ドライブに挿入します。
2. [スタート] メニューから [すべてのプログラム] - [DeploymentManager] - [イメージビルダー] を選択し、イメージビルダーを起動します。
3. 「イメージビルダー」画面の [パッケージの登録 / 修正] をクリックします。



4. 「パッケージの登録 / 修正」画面が表示されます。[ファイル] - [Linux パッケージ作成 (L)] をクリックし、パッケージを作成します。



5. 「Linux パッケージ作成」画面が表示されます。



9.1.2. ESM/ServerAgent インストール前の設定

1. SNMP 環境設定ファイルの設定

ESM/ServerManager から監視する場合は、監視対象サーバの SNMP 環境設定ファイル (/etc/snmp/snmpd.conf) を変更してコミュニティの権利を「READ WRITE」以上に設定する必要があります。以下を参考に、環境ファイルを作成してください。

関連情報: 各設定内容の詳細については、SNMP のオンラインヘルプを参照してください。

1. viなどのテキストエディタか、改行コードをLinux改行コード(LF)として保存できるエディタを開きます。
2. エディタからVMware ESXのデフォルトファイルであるSNMP環境設定ファイル(snmpd.conf)を修正して、コミュニティの権利を「READ WRITE」以上に設定する必要があります。

以下を参考に、SNMP環境設定ファイルを修正してください。

注: ファイルの保存時には、改行コードがLinux改行コード(LF)のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどのWindows標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードがWindows改行コード(CR+LF)に変換されます。

【VMware ESX の場合】

```
#####
# First, map the community name "public" into a "security name"

#      sec.name  source      community
com2sec notConfigUser  default    public

#####
# Second, map the security name into a group name:

#      groupName  securityModel securityName
group  notConfigGroup v1          notConfigUser
group  notConfigGroup v2c         notConfigUser

#####
# Third, create a view for us to let the group have rights to:

# Make at least snmpwalk -v 1 localhost -c public system fast again.
#      name      incl/excl  subtree      mask(opt) (1)
# view  systemview  included  .1.3.6.1.2.1.1
# view  systemview  included  .1.3.6.1.2.1.25.1.1
view  all          included  .1           80

#####
# Finally, grant the group read-only access to the systemview view.

#      group      context sec.model sec.level prefix read  write  notif
# access notConfigGroup ""  any  noauth  exact  systemview none none
access notConfigGroup ""  any  noauth  exact  all    all    none
```

- (1) viewディレクトティブの設定を行います。
デフォルトの設定 (名前がsystemview) をコメントアウト (先頭に#を追記) して、".1" のsubtree (配下も有効) に対して設定します。
- (2) accessディレクトティブの設定を行います。
デフォルトの設定 (systemviewに対するアクセス設定) をコメントアウト (先頭に#を追記) して、(1) で設定したviewディレクトティブに対して、read/writeの権利を設定します。

3. 作成した SNMP 環境設定ファイルを格納します。この格納先は、後に設定する Linux パッケージ作成画面の [実行設定] タブの [コピーするフォルダ] グループボックス内 [フォルダ名:] に指定します。

注: SNMP 環境設定ファイルは、別名で保存されています。

/etc/snmp/snmpd.conf.esx : VMware ESX のデフォルトファイル

/etc/snmp/snmpd.conf.orig : net-snmp のデフォルトファイル

/etc/snmp/snmpd.conf.backup : 上記スクリプトでバックアップしたファイル

2. 実行ファイルの作成

1. viなどのテキストエディタか、改行コードをLinux改行コード(LF)として保存できるエディタを開きます。

注: ファイルの保存時には、改行コードがLinux改行コード(LF)のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどのWindows標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードがWindows改行コード(CR+LF)に変換されます。

2. (esm_sa_bset.sh) という名前で、以下の内容のファイルを作成します。

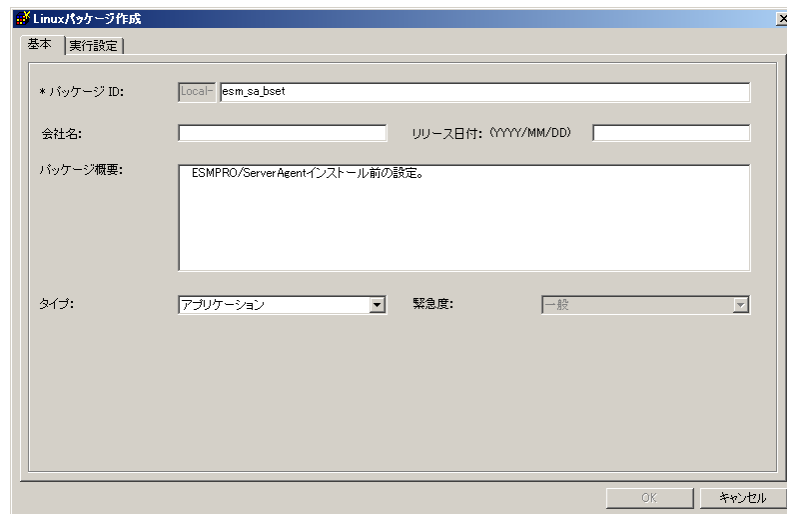
```
#!/bin/sh
/sbin/chkconfig --level 345 snmpd on > /dev/null 2>&1
/sbin/chkconfig --level 345 portmap on > /dev/null 2>&1
/sbin/chkconfig --level 345 ipmi on > /dev/null 2>&1
/sbin/chkconfig --level 345 ipmi off > /dev/null 2>&1
service portmap start > /dev/null 2>&1
service snmpd stop > /dev/null 2>&1
mv /etc/snmp/snmpd.conf /etc/snmp/snmpd.conf.backup > /dev/null 2>&1
mv snmp/snmpd.conf /etc/snmp/snmpd.conf > /dev/null 2>&1
service snmpd start > /dev/null 2>&1
```

- (1) snmpdとportmapが自動起動する設定です。
ESMPRO/ServerAgentは、snmpdとportmapの機能を使用しますので、chkconfigコマンドを使用して、ランレベル3、4、5で自動起動するように設定してください。
- (2) OpenIPMIの設定です。使用するOSバージョンや装置により異なりますので、ご使用の環境に合わせて設定してください。
 - ・ 本設定が不要となる場合
VMware ESX 4では、OpenIPMIを使用しますが、OpenIPMIは自動起動するため、本設定は不要です。
 - ・ OpenIPMIを使用する (ipmi on) 設定となる場合
/sbin/chkconfig --level 345 ipmi on > /dev/null 2>&1
Express5800/ ECO CENTER (NE1000-001/002) の場合は、OpenIPMIを使用します。
 - ・ OpenIPMIを使用しない (ipmi off) 設定となる場合
/sbin/chkconfig --level 345 ipmi off > /dev/null 2>&1
上記 (ipmi on設定) 以外のOS、および装置 (※1) において、ESMPRO/ServerAgentはサーバマネージメントドライバを使用します。サーバマネージメントドライバはIPMI (Intelligent Platform Management Interface) を使用するため、OpenIPMIとの同時使用はできません。
※1 Express5800/120Lh (リモートマネージメントカード未実装) の場合は、サーバマネージメントドライバのインストールが必要です。
- (3) portmapの開始の設定です。
ESMPRO/ServerAgentのインストール時にportmapが動作している必要がありますので、serviceコマンドを使用して、開始させてください。

- (4) 手順1「SNMP環境設定ファイルの設定」で作成した環境設定ファイルの設定です。SNMP環境設定ファイルのパスには、後に設定する「Linuxパッケージ作成」画面の[実行設定] タブの [コピーするフォルダ] グループボックス内 [フォルダ名:] に指定するイメージのコピー元パスの最後のフォルダ名を指定してください。
- <例> コピーするフォルダ名:に "C:%temp%snmp" を指定した場合は、"snmp/" を指定してください。

3. 「Linux パッケージ作成」画面での設定

1. [基本] タブを選択します。



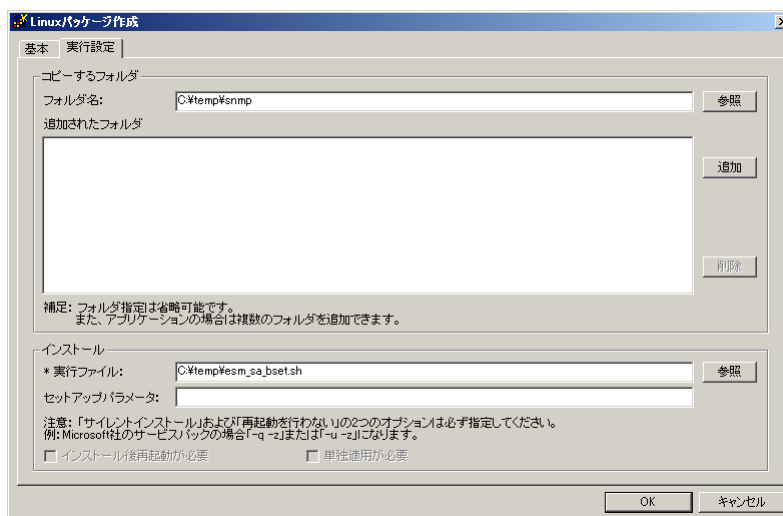
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-esm_sa_bset ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: 会社名、リリース日付、パッケージ概要の入力は任意です。

4. [実行設定] タブを選択します。



5. [コピーするフォルダ] グループボックスの [フォルダ名] テキストボックスに、手順 1「SNMP 環境設定ファイルの設定」で作成した環境設定ファイルを格納したフォルダを指定します。

<例> SNMP 環境設定ファイルが下記の場所に格納されている場合は、
"C:%temp%snmp" を指定してください。

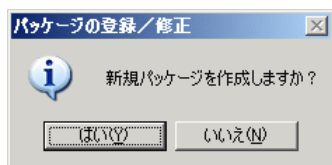
[格納先例]

C:%temp%snmp%snmpd.conf

6. [追加] をクリックし、フォルダを追加します。
7. [インストール] グループボックスの [実行ファイル] テキストボックスに、手順 2「実行ファイルの作成」で作成したファイルを指定します。

<例> C:%temp%esm_sa_bset.sh

8. [OK] をクリックします。
9. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



9.1.3. サーバマネージメントドライバのインストール

VMware ESX 4.x と Express5800 / ECO CENTER (NE1000-001/002) の場合はインストール不要です。

1. 実行ファイルの作成

1. viなどのテキストエディタか、改行コードをLinux改行コード(LF)として保存できるエディタを開きます。

注: ファイルの保存時には、改行コードがLinux改行コード(LF)のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどのWindows標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードがWindows改行コード(CR+LF)に変換されます。

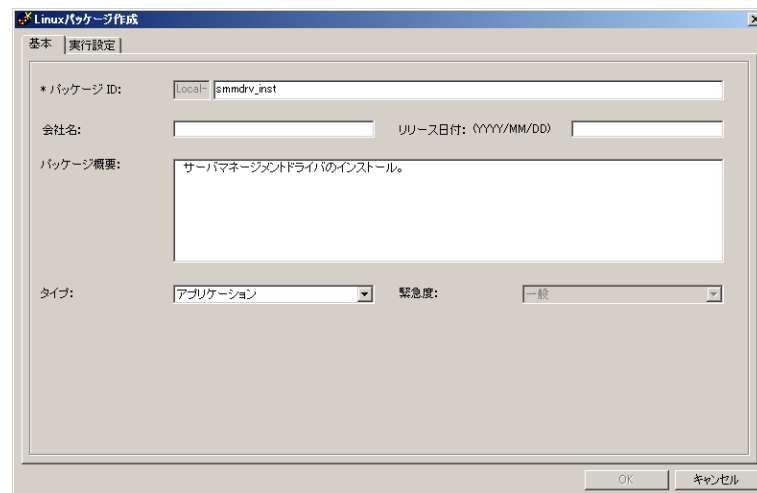
2. (smmdrv_inst.sh) という名前で、以下の内容のファイルを作成します。

```
#!/bin/sh
rpm -ivh common *.rpm > /dev/null 2>&1
sync > /dev/null 2>&1
```

- (1) rpmコマンドでインストールするパスには、後に設定する「Linuxパッケージ作成」画面の [実行設定] タブの [コピーするフォルダ] グループボックス内 [フォルダ名:] に指定するイメージのコピー元パスの最後のフォルダ名を指定してください。
<例> コピーするフォルダ名に "D:¥smm_drv¥vmware_3.0.2¥common" を指定した場合は、"common/" を指定してください。

2. 「Linux パッケージ作成」画面での設定

1. [基本] タブを選択します。



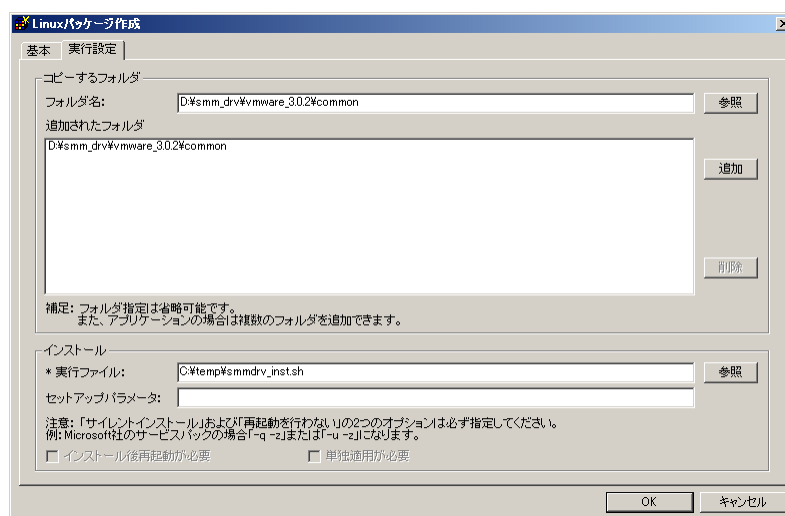
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-smmdrv_inst ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: 会社名、リリース日付、パッケージ概要の入力は任意です。

4. [実行設定] タブを選択します。



5. [コピーするフォルダ] グループボックスの [フォルダ名] テキストボックスに、対象 OS 機種に対応したサーバマネージメントドライバのフォルダを指定します。詳細については、CD-ROM 媒体に格納されている「ESMPRO/ServerAgent インストールガイド」を参照してください。

<例> サーバマネージメントドライバが下記の場所に格納されている場合は、
"D:%smm_drv%vmware_3.0.2%common" を指定してください。

[格納先例]

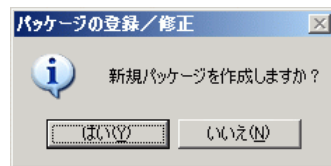
D:%smm_drv%vmware_3.0.2%common%libnechwtr-1.03.02-1.i386.rpm
libnecipmi-1.01.00-1.i386.rpm

6. [追加] をクリックし、フォルダを追加します。

7. [インストール] グループボックスの [実行フォルダ] テキストボックスに、手順 1「実行ファイルの作成」で作成したファイルを指定します。

<例> C:¥temp¥smmdrv_inst.sh

8. [OK] をクリックします。
9. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



9.1.4. ESMPRO/ServerAgent インストール

1. 実行ファイルの作成

1. viなどのテキストエディタか、改行コードをLinux改行コード(LF)として保存できるエディタを開きます。

注: ファイルの保存時には、改行コードがLinux改行コード(LF)のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどのWindows標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードがWindows改行コード(CR+LF)に変換されます。

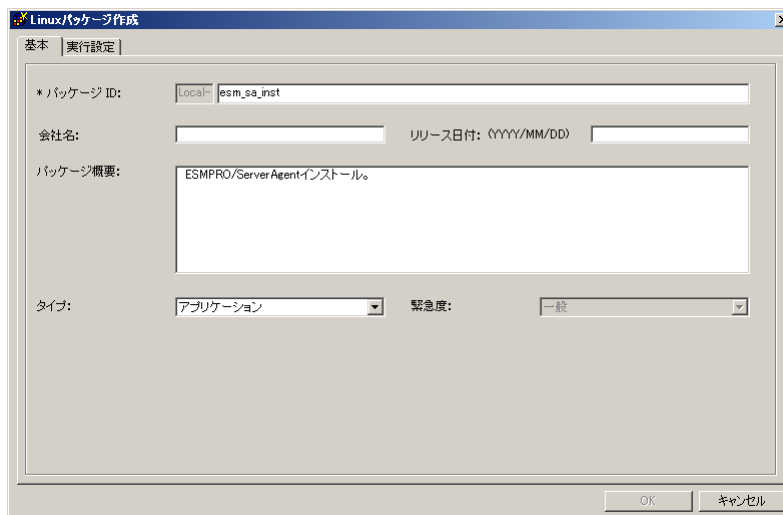
2. (esm_sa_inst.sh) という名前で、以下の内容のファイルを作成します。

```
#!/bin/sh  
rpm -ivh 42302-03/*.rpm > /dev/null 2>&1  
sync > /dev/null 2>&1
```

- (1) rpmコマンドでインストールするパスには、後に設定する「Linuxパッケージ作成」画面の [実行設定] タブの [コピーするフォルダ] グループボックス内 [フォルダ名:] に指定するイメージのコピー元パスの最後のフォルダ名を指定してください。
<例> コピーするフォルダ名に "D:¥esmpo_sa¥42302-03" を指定した場合は、"42302-03/" を指定してください。

2. 「Linux パッケージ作成」画面での設定

1. [基本] タブを選択します。



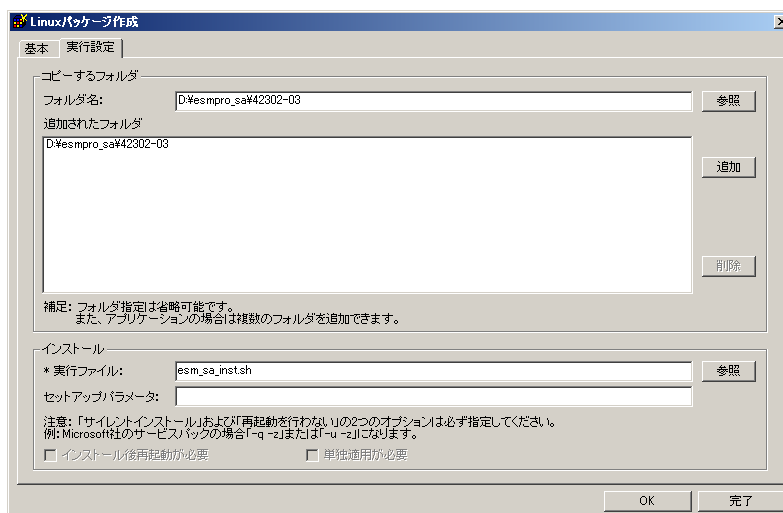
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-sa_inst ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: 会社名、リリース日付、パッケージ概要の入力は任意です。

4. [実行設定] タブを選択します。



5. [コピーするフォルダ] グループボックスの [フォルダ名] テキストボックスに、ESMPRO/ServerAgent のフォルダを指定します。詳細については、CD-ROM 媒体に格納されている「ESMPRO/ServerAgent インストレーションガイド」を参照してください。

<例> ESMPRO/ServerAgent が下記の場所に格納されている場合は、
"D:¥esmpro_sa¥42303-03" を指定してください。

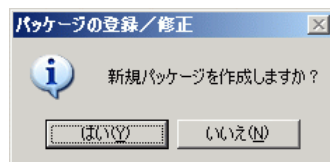
[格納先例]

D:¥ esmpro_sa¥42302-03¥Esmpro-common-4.2.30-2.i386.rpm
Esmpro-type3-4.2.30-2.i386.rpm
Esmpro-Express-4.2.30-2.i386.rpm

6. [追加] をクリックし、フォルダを追加します。
7. [インストール] グループボックスの [実行フォルダ] テキストボックスに、手順 1「実行ファイルの作成」で作成したファイルを指定します。

<例> C:¥temp¥esm_sa_inst

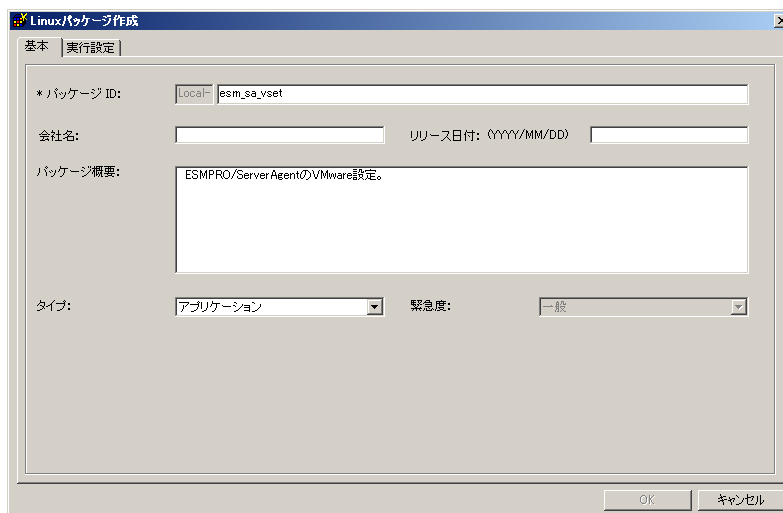
8. [OK] をクリックします。
9. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



9.1.5. ESMPRO/ServerAgent の VMware 設定

1. 「Linux パッケージ作成」画面での設定

1. [基本] タブを選択します。



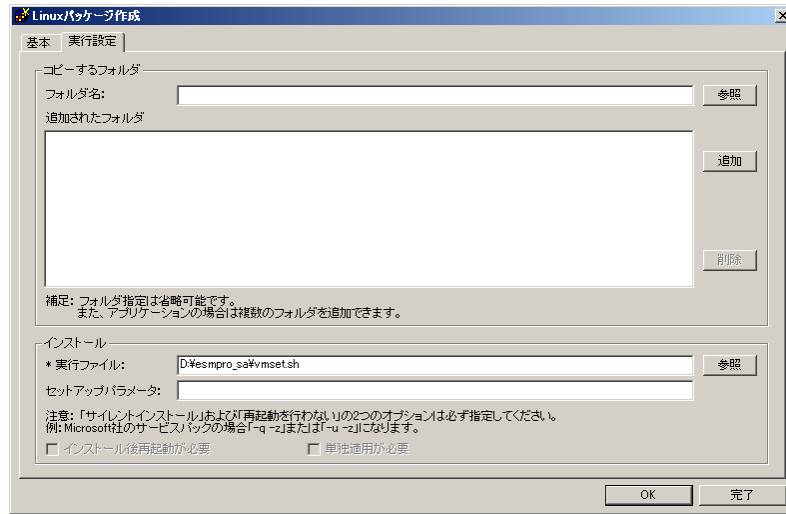
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-esm_sa_vset ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: 会社名、リリース日付、パッケージ概要の入力は任意です。

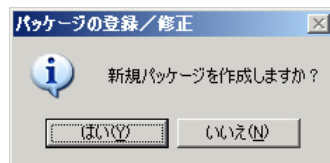
4. [実行設定] タブを選択します。



5. [インストール] グループボックスの [実行フォルダ] テキストボックスに、CD-ROM内にある vmset.sh ファイルを指定します。

<例> D:\esmpro_sa\vmset.sh

6. [インストール] グループボックスの [セットアップパラメータ] テキストボックスに、"-sata" を追加します。
7. [OK] をクリックします。
8. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



9.1.6. ESMPRO/ServerAgent インストール後の設定

esmamset コマンドを使用して、ラック名や通報手段 (SNMP) について設定します。

1. 実行ファイルの作成

1. vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを開きます。

注: ファイルの保存時には、改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

2. (esm_sa_aset.sh) という名前で、以下の内容のファイルを作成します。

```
#!/bin/sh  
/opt/nec/esmpro_sa/tools/esmamset -r RackName -c public -a 192.167.1.1
```

(1) (2) (3) (4)

- (1) esmamset コマンドで指定できるオプションには、以下があります。

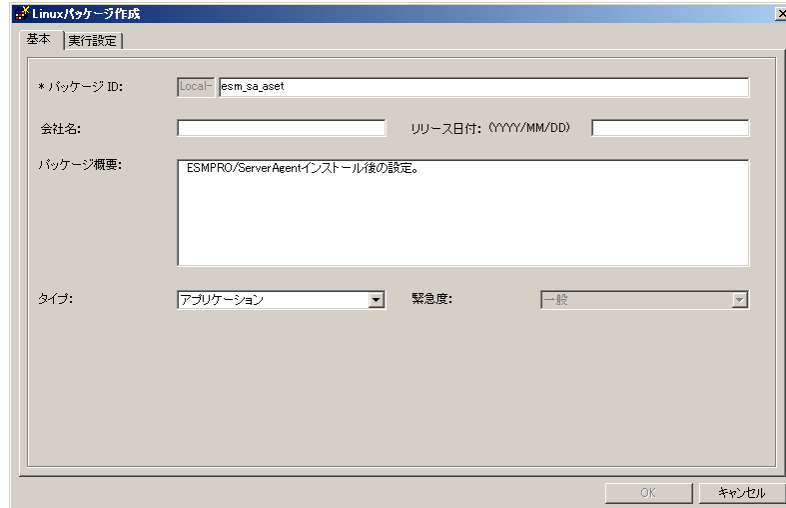
オプション	説明
-r <i>rackname</i>	ラック名が設定されます。※ラックマウント装置のみ
-c <i>community</i>	コミュニティが設定されます。 snmpd.conf に記載されていないコミュニティ名を設定した場合は失敗します。
-a <i>IPAddress</i>	通報手段 (SNMP) の通報先に IP アドレスが設定されます。 スペースを空けて複数の IP アドレスを指定できます。

- (2) 上記スクリプトでは、ラック名を "RackName" に設定しています。
- (3) 上記スクリプトでは、ESMPRO/ServerAgent で使用するコミュニティを "public" に設定しています。
- (4) 上記スクリプトでは、通報手段 (SNMP) の通報先に IP アドレスを "192.167.1.1" に設定しています。

注: 通報手段には SNMP を設定してください。

2. 「Linux パッケージ作成」画面での設定

1. [基本] タブを選択します。



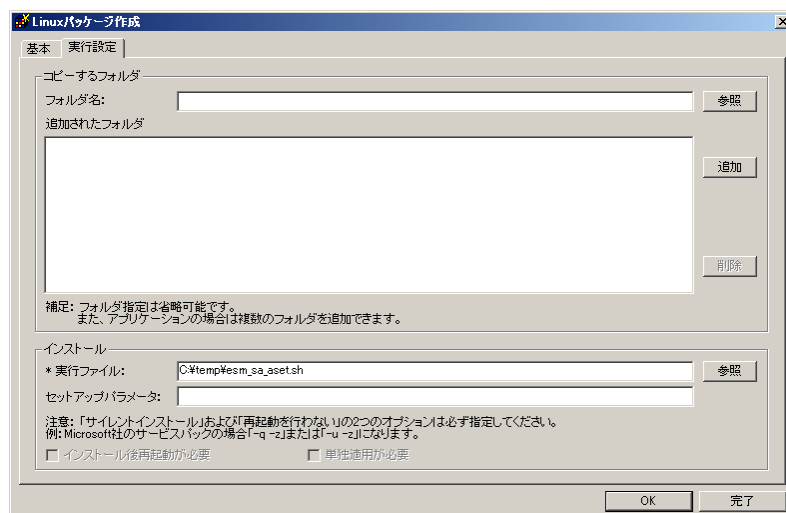
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-esm_sa_aset ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: 会社名、リリース日付、パッケージ概要の入力は任意です。

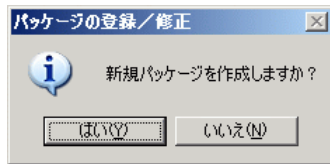
4. [実行設定] タブを選択します。



5. [インストール] グループボックスの [実行フォルダ] テキストボックスに、手順 1「実行ファイルの作成」で作成したファイルを指定します。

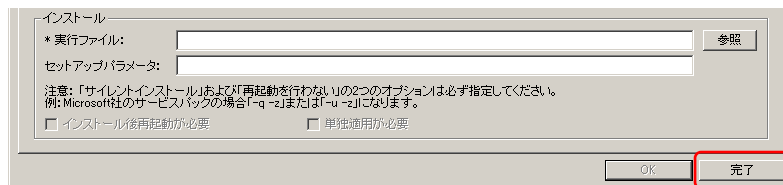
<例> C:¥temp¥esm_sa_aset.sh

6. [OK] をクリックします。
7. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



3. 登録完了

- すべてのパッケージを登録後、「Linux パッケージ作成」画面の [完了] をクリックし、終了します。



9.1.7. シナリオファイルの作成

1. DPM の Web コンソールで、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。ツリービュー上で、[リソース] アイコン - [シナリオ] アイコン - [シナリオ追加するシナリオグループ] アイコンをクリックします。

2. [シナリオ] アイコンに対する [設定] メニューが表示されますので、[シナリオ追加] をクリックします。メインウィンドウに「シナリオ追加」が表示されますので、[パッケージ] タブを選択します。

✎ シナリオ追加

グループ名
 シナリオ名

HW設定 OS **パッケージ** バックアップリスト オプション

パッケージ
| 追加 | 削除 |

<input type="checkbox"/>	名前	種別	
<input type="checkbox"/>	Local-esm_sa_bset	アプリケーション	<input type="button" value="↑"/> <input type="button" value="↓"/>
<input type="checkbox"/>	Local-smmdrv_inst	アプリケーション	
<input type="checkbox"/>	Local-esm_sa_inst	アプリケーション	
<input type="checkbox"/>	Local-esm_sa_vset	アプリケーション	
<input type="checkbox"/>	Local-esm_sa_aset	アプリケーション	

| 追加 | 削除 |

実行タイミング設定

配信後すぐにパッケージを実行
 次回起動時にパッケージを実行

配信条件設定

パッケージ実行後に再起動を行う

配信条件設定

ユニキャストでデータを送信する
 マルチキャストでデータを送信する

最大ターゲット数(1-1000)
 最大待ち時間(1-1440分)
 ・ マルチキャストIPアドレス(パッケージ)
 ・ マルチキャストTTL

>>Time to live(TTL)とは、ネットワーク上でマルチキャストトラフィックが通過するルータの数です。

最大転送レート MB/分

3. 実行する順に、作成したパッケージを選択します。

<例>

1. Local-esm_sa_bset … ESMPRO/ServerAgent インストール前の設定
2. Local-smmdrv_inst … サーバマネージメントドライバのインストール
3. Local-esm_sa_inst … ESMPRO/ServerAgent インストール
4. Local-esm_sa_vset … ESMPRO/ServerAgent の VMware 設定
5. Local-esm_sa_aset … ESMPRO/ServerAgent インストール後の設定

4. [シナリオ名] テキストボックスに一意のシナリオ名を入力します。

<例> esmsa_setup

注: その他の設定は任意です。

5. [パッケージ実行後に再起動を行う] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] をクリックします。

以上でシナリオファイルの作成は完了です。

10. DPM を使った ESX パッチの配信シナリオ の作成

DPM を使用すると、管理サーバから ESX のパッチの配信が可能となります。

VMware ESXi の場合は、DPM クライアントがインストールできないために本機能を使用することはできません。

パッチの配信をするには、以下の手順でパッケージの作成が必要になります。

1. パッチインストール用スクリプトの作成
スクリプトには、パッチを一括で適用するように記述することができます。
2. パッチの Linux パッケージの作成
3. シナリオファイルの作成

注: 以降の手順では、ESX のパッチのファイル名 ESX-Patch1、ESX-Patch2、保存しているフォルダを C:%temp%ESX%Patch として説明します。

1. パッチインストール用スクリプトの作成

ESX Sever の esxupdate コマンドを使用して、パッチをインストールするスクリプトを作成します。

関連情報: esxupdate コマンドの使用方法は、VMware 社発行のマニュアルを参照してください。

1. vi などのテキストエディタか、改行コードを Linux 改行コード (LF) として保存できるエディタを開きます。

注: ファイルの保存時には、改行コードが Linux 改行コード (LF) のみとなるように注意してください。

メモ帳やワードパッドなどの Windows 標準のエディタでは、ファイル保存時に自動的に改行コードが Windows 改行コード (CR+LF) に変換されます。

2. (esx-update.sh) のファイル名で、以下の内容のファイルを作成します。

VMware ESX 4.0 の場合は下記のようにしてください。

```
#!/bin/sh
Logfile="/root/esxupdate.log"
list="ESX-Patch1.zip ESX-Patch2.zip"
cd Patch
for file in $list
do
  unzip $file >> $Logfile 2>&1
  esxupdate -m metadata.zip update >> $Logfile 2>&1
  rm -rf metadata.zip esx >> $Logfile 2>&1
done
```

- (1) ログファイルの保存場所を指定します。環境に合わせて変更してください。
- (2) パッチのファイル名を列挙します。パッチ間に依存関係がある場合はパッチを適用する順番に注意してください。
- (3) パッチを保存したフォルダ名を指定して移動します。
<例> C:\temp\ESX\Patch\ESX-Patch1.zip の場合、Patch を指定します。
- (4) パッチファイルを解凍します。
- (5) esxupdate コマンドを使用して、ESX にパッチを適用します。
- (6) 適用が完了したパッチの削除をします。

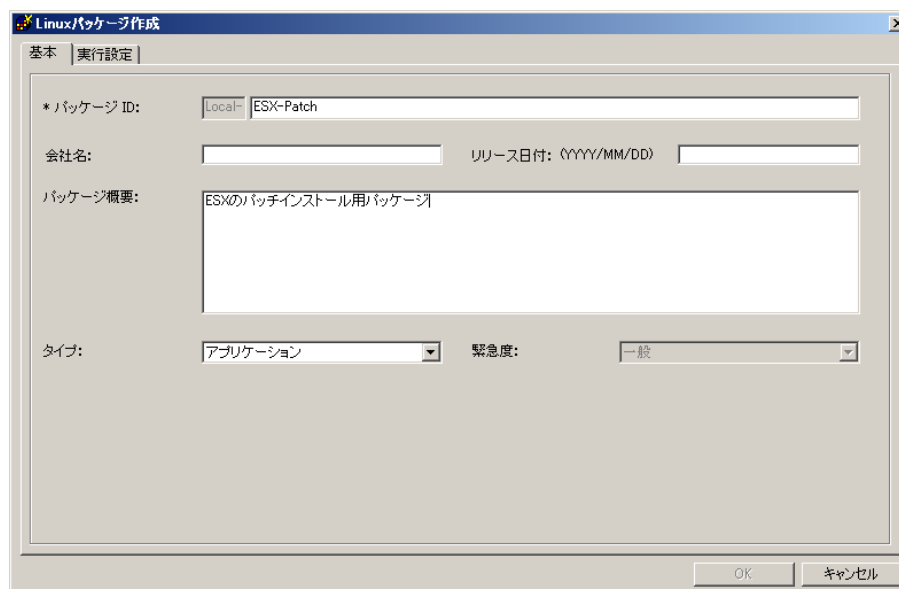
注:

- ・ パッチのインストールに再起動が必要な場合でも、シナリオの配信では再起動をしません。再起動が必要なパッチの場合は、DPM でシナリオ作成時に [アプリケーション実行後に再起動を行う] チェックボックスをオンにしてください。
 - ・ 1つのシナリオで複数のパッチを配信時、パッチ間に依存関係がある場合はパッチを適用する順番に注意して、パッチインストール用スクリプトを作成してください。
 - ・ パッチのインストールにESXをメンテナンスモードにする必要がある場合は、パッチの配信をする前にESXをあらかじめメンテナンスモードに変更してください。
-

2. パッチの Linux パッケージの作成

DPM のイメージビルダーを使用して、ESX パッチの Linux パッケージを作成します。

1. [基本] タブを選択します。



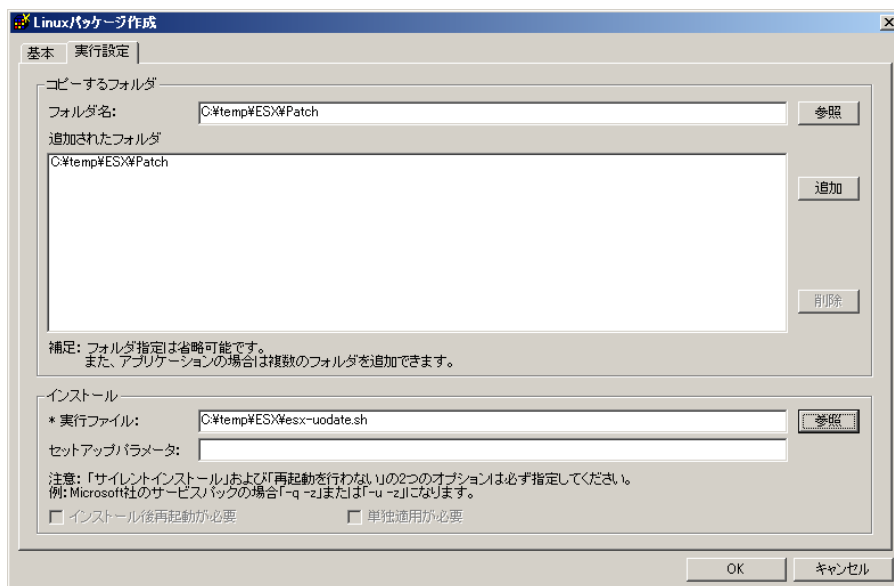
2. [パッケージ ID] テキストボックスに一意のパッケージ ID を入力します。

<例> Local-ESX-Patch ("Local-" は固定値)

3. [タイプ] プルダウンボックスから [アプリケーション] を選択します。

注: その他の項目の設定は任意です。

4. [実行設定] タブを選択します。



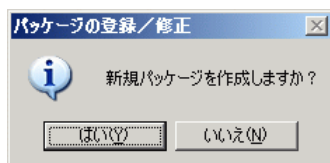
5. [コピーするフォルダ] グループボックスの [フォルダ名] テキストボックスに ESX のパッチを保存したフォルダを指定します。

<例> C:\temp\ESX\Patch

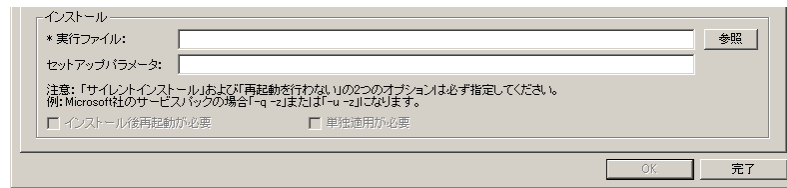
6. [追加] をクリックし、フォルダを追加します。
7. [インストール] グループボックスの [実行ファイル] テキストボックスに、手順 1「パッチインストール用スクリプト作成」で作成したファイルを指定します。

<例> C:\temp\ESX\esx-update.sh

8. [OK] をクリックします。
9. 「パッケージの登録 / 修正」ダイアログボックスが表示されます。
[はい(Y)] をクリックします。



10. 「Linux パッケージ作成」画面の [完了] をクリックし、終了します。



3. シナリオファイルの作成

1. DPMのWebコンソールで、タイトルバーの [運用] をクリックして、[運用] ビューに切り替えます。ツリービュー上で、[リソース] アイコン - [シナリオ] アイコン - [シナリオ追加するシナリオグループ] アイコンをクリックします。

- [シナリオ] アイコンに対する [設定] メニューが表示されますので、[シナリオ追加] をクリックします。メインウィンドウに「シナリオ追加」が表示されますので、[パッケージ] タブを選択します。

シナリオ追加

グループ名: Apps
シナリオ名: esx-patch

HW設定 OS **パッケージ** バックアップ/リストア オプション

パッケージ

名前	種別
Local-ESX-Patch	アプリケーション

実行タイミング設定

配信後すぐにパッケージを実行
 次回起動時にパッケージを実行

配信条件設定

パッケージ実行後に再起動を行う

配信条件設定

ユニキャストでデータを送信する
 マルチキャストでデータを送信する

最大ターゲット数(1-1000): []
最大待ち時間(1-1440分): [10]
マルチキャストIPアドレス(パッケージ): [239.192.0.1]
マルチキャストTTL: [16]

>>Time to live(TTL)とは、ネットワーク上でマルチキャストトラフィックが通過するルータの数です。

最大転送レート: [500] MB/分

OK キャンセル

- 手順 2「パッチの Linux パッケージの作成」で作成したパッケージを登録します。
- [シナリオ名] テキストボックスに一意のシナリオ名を入力します。

<例> esx-patch

注: その他の項目の設定は任意です。

5. シナリオは配信後に再起動が必要な場合、[パッケージ実行後に再起動を行う] チェックボックスをオンにします。
6. [OK] をクリックします。

以上で、DPM に ESX パッチの配信用シナリオの作成は完了です。

